

研究紀要

第 22 号

(目 次)

〈教育実践報告〉

愛地球博パビリオン

「演出」レポート …………… 柳 本 博 … 1

高校サッカー部の合宿が部内のモラル及び

部員の心理的変容に及ぼす影響 …………… 神宮司 親 治 … (1)

〈書 評〉

高木 秀男 著『科学思想としての物理学』 …………… 北 原 武 道 … (7)

2006

獨協中学校・高等学校



1位でも15位でもなく瀬戸会場レストラン前のマンモス



3位 韓国館の外観



4位 三井・東芝館の待ち風景



2位 アルゼンチン・タンゴ



広場から企業パビリオンゾーンをのぞむ



6位 三菱未来館 ウェイティングゾーン

愛・地球博パビリオン

「演出」レポート

国語科 柳 本 博

■入場ゲート

ENTRANCE

実はいちばん手間がかかった

牢越しに、アンソニー・ホプキンスがジョディー・フォスターの指に触れる『羊たちの沈黙』。これでもか、と苦難を乱れ打ちする『ダイ・ハード』。『戦場のメリークリスマス』では、クライマックスのコマ落しとラストのストップモーション。黒澤明の人物の配列。北野武のリズム。宮崎駿の浮遊感。「演出」というと、すぐにこれらの映画を思い浮かべる。演劇部で多くの作品を劇作・演出してきた。演出は奥が深い。同じ戯曲・脚本でも、演出によってまったく違うものになる。そもそも演出はよく料理にたとえられる。素材は同じであっても、料理人の知恵や手さばき、少しの気配りによって違うものになりうる。「ジェットコースターを批評する人はいない。ジェットコースターは楽しければそれでいいのだから」。ある本で、こんな一節を読んだことがある。同感である。しかし、単なるライドではないジェットコースターは批評に値するのではないか。

愛・地球博を観て、その演出について何度も考えた。演劇部の合宿を含めて訪れた、35年ぶりの万博。多くは演出に関するコメントである。これは、万博の記憶をとどめ今後に役立てるための覚え書きである。

なお、全104のパビリオンのうち、70ほど観た。7割で批評ができるのか。逡巡する数字ではある。しかし、有力館を中心に観た。7月発行のガイドに「パビリオン満足度ランキング」があった。そのベスト30のうち27は観た計算になるのだ。加えて、その他、インターネットで調べたランキングと自分の選んだランキングを比較してみたい。幾多の資料は万博後、数か月を経た現在でも取り出せる。IT時代にふさわしく、予告編など動画も含めた資料は容易にネットで入手できる。しかし、ここではあくまで、自身の主観による見聞の感想と批評のレポートに徹したい。独断と偏見、かつネタバレありである。

2005年3月25日から半年間、愛知県で開かれた愛・地球博。出かけたのは6月の下見と、8月の合宿本番2日間、8月下旬と9月の休日の全5日間。入場には手間取った。夏休み中はともかく、最初の下見で出かけた6月の日曜日からして閉口した。飛行機搭乗時なみの嚴重なボディチェックなのだ。加えて、話題となったベッポトルの持込禁止が拍車をかけている。テロ対策といわれれば、それまで。しかたないか。しかし、後でも触れることではあるが、並んで待っている最中に、「元をとらなきゃ」気分はふくらむ。時間と経済的負担の元を。ものすごく気合いの入った入場待ち列。さて入場である。

《1位》ブルーホール〜マンモスラボ 97点 DISPLAY
超大型スクリーンとナマ・マンモス

早くから目玉というふれこみがすりこまれ、万博といえどもとにかく「マンモス観た？」が合言葉となっていた。1万8千年前にたしかに実在し、いまは絶滅した幻の生物、巨大マンモス。まさに『ジュラシック・パーク』の世界である。恐竜の骨争奪戦の香港映画『0061北京より愛をこめて』（チャウ・シンチー主演）の影響もあり、さぞかし厳重な警備が敷かれているものと予想していた。緊迫した雰囲気、神秘的な古代への憧憬。……予測は裏切られることになる。

まずは隣接するグローバルハウスのブルーホール経由という整理券がとれた。スクリーンが大きい。西暦にあわせて2005インチ。とにかくデカイ。幅50m、高さ10m。横の長さ50mは圧巻の一言。「レーザードリームシアター」と命名されている。一部ではSONY館ではないかといわれたほどに企業色は出ていた。それでも、最前列の車椅子、ベビーカー列の次席に陣取ってみると、その大きさは実感された。題名は『2005年。地球の旅』。ヤンキースタジアムのごジラ松井。相手投手の指を離れるところから打撃の瞬間までなんとワンカットなのだ。横一列に並んだ極彩色の民族衣装に身を包んだアフリカ人たちの姿。黒人や白人、日本人の赤ん坊がちよこんと座っている愛らしい姿。他にも滝や海、氷山、多くの「大」自然の「超」拡大版に圧倒される。以前、新宿にあった巨大スクリーンが売り物、アイマックスシアターを思い出す。やっぱ凄え。

さて、待望のマンモスである。マンモスラボでついにご対面。やっと見る事ができた。首の部分と、2mはあるうかという屈曲した角。毛のはえた額のあたりが生々しい。しかし、その巨体に比してちっこい目。いわゆる象のような優しい目だ。優しいといえばガードマンの目。ものものしい厳戒警備かと思いきや、ただの万博ポロシャツの軽装。「こちらからどうぞ」の声もソフトそのもの。ベルトコンベアにこちらが乗せられてわずか1分？ マンモスラボのトンネルを出る。陽射しがやけにまぶしいのは、暗いラボ内とのコントラストだけではない。太古の歴史に肉迫した感動もちょっぴりある。永遠に思いをはせる。1万8千年も永遠ではない。一瞬、中に戻りたい気になるが、それはできない。次々と押し出される人々。ただし、マンモスラボ単独観覧だけではあまりにあっけない。正味1分でしかない。やはり大画面のスクリーンから派生した感動に、「ナマ・マンモス」という終着点があつてこそ、感動を与えてくれるのではないか。その点では、ブルーホールからのこのコースがいちばんよかったように思う。オレンジホールも観たあとだけにそう実感している。

総合評価で、シームレスの2005インチ大画面とナマ・マンモスの迫力。合わせて一本。第1位。

今回の万博185日間の総入場者数は当初目標を2百万人上回る2千2百万人超。マンモスを観た人は7百万人だという。数には圧倒される。もっとも、70万万博はなんと6千万人超。国民の半分以上が入場したというのだから、いまさらながら恐れ入る。

《2位》アルゼンチン館 95点

DANCE

本場のアルゼンチン・タンゴ

タイトにしてソリッド。ナマのダンスの魅力を堪能。2曲。実に静謐、紳士的。それでいて妖艶。時にアクロバティックに、エロティックに、男性が女性の体を引き回す。くるりん。しゅたっ。軽快なステップ。

思いもよらず立ち寄った。ダンスがあることは知っていた。でもあえて観るつもりなどなかった。毛頭なかった。退屈な南米のパビリオンをたらたら観ていた。舞台と大きなスクリーン。ほぼ素通りして出ようと出口へ。いや、実際に一度外に出た。しかし、逆流してくる人の波を感じて（それでもそんなに多くはない「さざ波」程度）、なにげなくまた戻ったのだ。すると、数分前にはなかった人ばかり。オヤ？ 少し高台になったステージ前の長椅子にぎっしり座っている。つられて中へ。やや上手寄りではあったが、間近の最前列。ふと後ろを見るとそれまで空いていた両側のドアが閉められている。そう、毎正時（まさにそのとき10時ジャストの初回）に1日11回行われるタンゴダンスのショウタイム。

まずアルゼンチン女性が説明。10分の映像のあと、タンゴがあり撮影禁止なども告げる。のち、英語、仏語でも同様のアナウンス。メルシーボクーが耳に残る。心地よい。周りの客も反芻するばかりか口ずさんでいた。映像は凡百の外国館に比べれば多少テンポはよくても特筆すべき何かなどない。だがそれも、あとのナマダンスの助走にして序章、引き立て役、あくまで前座に過ぎない。映像はナ

マには勝てない。アルゼンチンの文化、スポーツ、そして首都ブエノスアイレスの景色。次に、ブエノスアイレスの中心部にある繁華街の夜景になって映像は一時停止。

その夜景をバックにタンゴショー開幕。厳かな足取りで黒タキシードの男性と黒ワンピースの女性が入ってくる。息を呑む。ウォン・カーウァイ作品で観たタンゴが目の前で繰り広げられている。涙が流れるほどの感銘を受けた。意味ではない。何か心の琴線に触れたら思いだ。言葉ではない。言葉に移しかえられない何か。舞踏を劇場で観る感動とはこれか。最後、ふたりはポーズをとり、そこだけ写真撮影がOKとなる。アンコールの声には応えず、階段を下りに袖に去る。一期一会。見送るときに写真を撮るが、感涙のためかちゃんとした構図に捕らえられずにいた。そこは残念ではあったが、思いもかけず掘り出し物の外国パビリオンに出会った感動を胸に出た。

まったくのノーマーク。意図せずに偶然観られたという喜びは、もしかすると並んだ果てに観られたという喜びと、同等の価値があるのではないか。偶然ラジオから、もしくは街角で流れてきた大好きな曲の魅力が倍加して聞こえるのに近いのかもしれない。

他にも、東南アジアやアフリカ系のパビリオンでダンスなどのパフォーマンスが行われていた。路上のものも含めて、なかなか時間が合わずに見られなかった。見ていたら、おそらくその館の評価は高まっていたであろう。しかし、アルゼンチン・タンゴのキレのよさが色あせることはない。

3Dアニメ『TREE ROBO』

当日予約でゲット。専用機にチケットをかざし、時間の印字された薄い紙をとる。時間になったら対象の入口でその薄紙を見せるシステム。効率のいい方式だ。こういうかたちで予約をとる館は少ない。外国館ではほとんど唯一といってもいいほどである。それだけの価値はあるのか。不安も少々。しかし、このメインとなるセリフのない3Dアニメは大きな感銘をもたらしてくれた。出色の出来。

シアターにいたるまでの場所はさまざまな色の感覚で全体をコーディネートしており、美しくはある。しかし、それ以上のものではない。ペ・ヨンジュンとチェ・ジウのパネルもある。群がるご婦人たちに失笑を禁じえない。

さて、シアター。前回の上映が終了するまで、少し待たされ、入口で3Dメガネが手渡される。全体が薄手のグレーのサングラス。昔のような赤青ではないのはなぜだろう。さて、その『TREE ROBO』。

①いかにもオートマチックな機械の動き。機械の視点。人間は太陽光を利用したロボットを作って博物館に。最初はその太陽光ロボと人間は仲良く暮らす。自然豊かな風景。花の枝につかまり回転して宙を舞う少年。見守るロボット。おだやかな光がふりそそぐ。

②だが、幸福もつかの間。さらに効率の良い有機水銀ロボットが開発される。有機水銀は限られたエネルギーのため奪い合いになり、人間は太陽光ロボ同士を戦わせる戦争を始める。山奥で少年とふた

りで暮らす太陽光ロボにも、とうとう魔の手が。ふたりの仲は引き離され太陽光ロボは戦争に狩り出されてしまう。

③ついに核爆弾が落ちる。ロボットたちは吹き飛ばされ戦争は最終的には荒廃した世界。最後まで残っていたロボ頭頂のシグナルもフツと消える。

④少年はそんな荒廃した土に植物を甦らせようと、山奥でせっせと水を運び続ける。長い時がたち、少年にはもう白髪が交じっている。ロボの体に残された種が、わずかな太陽の光によって芽生えることになる。光が宿る。新芽を通じてエネルギーを得たロボが少年と劇的な再会。そしてロボは巨大な木となり、荒れた世界は一気に緑と水に溢れた世界に戻る。それがTREE ROBO。大団円の一気にまくしてたてる感じは涙をほとばしらせるに十分な出来。

ロボットの造形はラピュタ、途中実際にスクリーンの前に人が来て舞いを演じる衣装も、ナウシカ？ ラストの一气解決も宮崎アニメの多大すぎる影響か。他にも、主人公は『銀河鉄道999』の鉄郎少年のような地味な風貌。タクトをサツと振るとあつというまに変化する『ファンタジア』のミッキーも想起される。先行各アニメのアレンジ。批判はいくらでもできるが、とにかくみずみずしいのだ。見事な換骨奪胎ぶり。「韓国奪胎」か。3Dのぼやけた感じがこのストーリーの夢幻のような感じともよくあっていた。

いま話題の韓流シネマ。これまでは数本しか触れてこなかった。しかし、茶化すことなく正攻法で真正面からグイグイ押してくるドラマは心地よい感触であり、今回も同じ真摯な姿勢は感じた。

映像参加型フューチャー・キャストシステム

自分の出演する映画を観る。そのためにはセリフを覚える必要も役作りもいらない。2時間待っただけ。スペースチャイルドアドベンチャー『グランオデッセイ』。自らが破壊してしまった地球を離れ、宇宙に移住した人類の子孫が、巨大な宇宙船ニモニック号で、母なる地球を目指すという壮大な物語。モンブラン船長(川加山雄三)と、謎の少女・アリス以外のキャストは、すべて偶然並んだグループの計20人。

①入館者はその20人のグループに分けられ、小さな部屋へ。そこには5台の穴の開いたスキャナーへ。顔を思い切りねじ込み、7方向から顔を撮影してコンピュータが読み込む。3Dスキャンして取り込んだ情報は瞬時にCG化、顔以外の映像と合成される。このとき眼鏡は外し、眉毛に前髪がかかる人は手で上にあげて押さえる。同僚のN氏のことを思い出す。

②全員2回ずつの撮影が終わると、映画のプロローグ映像。舞台は未来の地球。地球は人間が作り出した環境浄化システムによって、人類が住めない星になった。そのため人類は宇宙船に乗り込み、ワーブゾーンを越えていくつかの星に散らばる。しかし宇宙には地球ほど環境の整った星はなく、水のない未開の星にシェルターを造って暮らす。そして時は流れ、人々の間ではもはや地球は伝説の存在。そこに惑星フロンティアの砂漠の底から発掘された、巨大宇宙船・ニモニック号。人々は、この艦に乗って、母なる星・地球に通じる

スペースゲイトを探そうと決意。船長と20名の勇者を選び出す。どこからか聞こえてくるザザザという謎の音。人々は伝説となった地球へと旅立つ。

③小劇場のような狭さの客席へ。映画スタート。イントロダクションの登場人物紹介で自分がどの役に振られたか分かるしかけ。知的なブレイン、アクティブなガーディアン、重鎮・オソリティー、連絡係・レシーバーの4種類。動きや顔の表情はもちろんセリフもあって、まさに自分が演技しているよう。年齢などの特徴で選んだらしいが、僕はブレインにふられて満足。知的な内面は隠しきれないか。途中、2か所ほどアップもあり、「敵機来襲！」のセリフも(声は共通の声優)。

④あっとい間に感動の結末。地球へ。最後はそれぞれのコロニーから集結するということで20人がそれぞれ60人へ、そして最後には全部で240人が3方向から鑑賞する巨大スクリーンに変貌。横の壁がググッと取り払われ、みんな一緒に地球を目指す、という内容と劇場が一緒になるのだ。ハードとソフトの合体。なんという一体感。気分も昂揚。その客席のスペクタクル感も相まって面白さ倍増。それまで劇場やスクリーンの小ささ・狭さがいまいちだったために、心地よい解放感を味わう。波の音が地球のあかし、という設定も抒情的。出演したワケでもないのに快い疲労感とともに外に出た。

今回の万博で登場したいくつかは近く応用されて再体験ができるはずである。中でもこのフューチャーキャスト・システムはすぐさま同様のものが出てきそうである。近未来、一般的になってほしい。

《5位》日立グループ館 91点

R I D E

未来志向ハイテク体験型ライド

建物左寄りが地割れして大きな滝。実際の水が流れ落ち、その下は常に大混雑。各種ランキングで軒並み第1位に輝く。朝9時5分入場時に早くもゲート入口に「整理券終了」表示。40分待ち（1）の日も。観られた日は午後5時前から並んで8時過ぎに入場。3時間余といえば、新幹線経由で会場から自宅まで。その価値は？

① 受付で顔写真撮影。下の名前とチケットを登録。まずは体験型ブレショウ。希少動物のデータを燃料電池製情報表示端末「NATU RE VIEWER」で。森や海などのエリアには動物の写真が貼られたセンサーがあり、端末をかざすと、その動物の情報と、一部は映像まで表示。メインの準備にかかっているのだから、「待たされ感」は全くない。

② メインは「ユビキタス・エンターテインメント・ライド」（一周6分、16人編成）。目にはゴーグル、右手にハンドセンサー。ゴーグル越しに前を見ると、実際にあるジオラマ（模型）。そこにCGのフクロウ博士がやってきて説明を始める。手を差し出すと博士は自分の掌に。裏返すと羽ばたいて止まろうとする。ゴーグルには実際の景色が見えているようでいて、ゴーグルにつけられた小型カメラが映した実際の景色と、博士のCGを「瞬時に」合成して見える形にしているのだ。ジオラマ+CGで本当に触っているような不思議な感覚に陥る。手を使う楽しさ。

③ ライドが動く。プロ（エビ）ローグを挟み、ジャングル、サバン

ナ、オーシャンの各シーンでは、スコープを覗く位置や角度により、見え方が変化したり、こちらの動きへの反応などユビキタス（双方向性の意。「指、来たッス」ではない）が可能。まずはジャングル。実際に右手を動かしてCGのパナナを投げると、猿がキィキィ言いながら取りに来る。そしてサイがこちらに突撃。ぶつかった瞬間、実際にライドに衝撃。思わずビクリ、他の席から悲鳴。キリンに顔を近づけると上によけたり、鼻息で震え、上空への鳥を目で追うとその姿が。

④ 海のエリアで大きなタイマイ（海亀）。生物の選択が可能なコーナーも。最後は目の前に自分の顔写真が登場。博士から下の名前をサン付けで呼ばれてドキリ。「自然を大切に」という教訓も素直に受け取れる。もはや親密。

⑤ ライドを降りてポストショー。ライドの旅を振り返る。入場券には日立のミュージックチップが埋め込まれていて、機器にかざすと、画面に記念写真表示。

⑥ 写真はインターネットでその後ひと月ダウンロード可能。家に帰ってやってみたのはいうまでもない。すべて無料。豪気さに感無量。多くで第1位も納得。しかし、イチャモンをつけるとすると、並ぶ時間ほどのことが果たしてあったか、といういわば八つ当たり。悔しいけど、楽しませるコツを心得ていやがる。参った。

バーチャル・リアリティー（仮想現実）がすぐそこまで身近になってきた実感ひしひし。『朝日のような夕日をつれて91』で観たときは遠い新世紀のこととおもっていたが。おっと、もう21世紀か。

天地無限映像空間 I-FXシアター

もしも月がなかったら。そんなの簡単、夜、暗いだけ。そう答えるのは浅はか。米国天体物理学者・ニール・F・カミンズ著『もしも月がなかったら』をベースに描く世界。

① ウェイティングゾーンでは、二体のwakamaru（牛若丸より命名。万博後すぐに池袋西武でデモをしていて驚く）がユーモアたっぷりに出迎えてくれる。ただし、ロボットのすぐ後ろにスピーカーがあるため、ロボット自体から声が出ていないような錯覚に陥るのは残念。

② プレショーゾーンにはwakamaruが一人。月について説明を始める。月の小ささ、軽さを話しているとその「月」に目と口が擬人化されて登場。話しかけてくる。さらには「地球」も。月と地球には奇跡的なバランスがあるということ。そして月が誕生した経緯の説明があつて、いよいよI-FXシアター（想像、無限などの意の造語）。

③ 「月がなかったら地球はどうなっていたか」と、「あつたからこそ地球はこんなに美しい」という映像が繰り返し広げられる。仮想の地球をCG映像で紹介。スクリーンが途中でワイドになり、天井と床が鏡張り、万華鏡のように美しい映像が広がる。まず地球と惑星の衝突「ジャイアント・インパクト」。砕け散り、自転の末、固まる。そこから地球（のようなもの）と月（のようなもの）に分かれていく。衝突の瞬間は音響も大迫力。客席から驚嘆の声。そこから

現代の地球に至るまでのプロセスを体感。その後、月のない地球（ソロン）の想像される世界が映像となって現れる。自転めまぐるしく、一日が8時間周期。つまり落ちて生物が成長・進化できない。下等生物しか育たず、人間のような高等生物が生まれる可能性は低い。四本足の動物たちが駆け回る。空を飛ぶケダモノ。殺伐とした世界。当然人間は存在せず、現在の地球とはかけ離れた世界。恐竜や多数の下等生物の争い。大地から空へ。空を飛ぶモノ同士、獲物を奪い合う食物連鎖の迫力。突進してくる恐竜の脅威。生理的に「もうやめてほしい」と思うあたりで「もしも月がなかったら」こうなりました、でもいまはあるから……と、最後はとてもきれいな映像。花、咲き乱れる。ほっとひと安心。

普通の映画館の23倍の大きさの巨大映像と、ミラー、重低音の音響などのスペシャルエフェクトを複合せ、無限の拡がりを感じさせるド迫力映像にタジタジ。目前の180度は全部映像の縦横無尽感。3Dメガネをつけているわけでもないのに、迫力に度肝を抜かれる。建物も上から見ると巻き貝のような形。時がたつにつれて壁の緑が増えていった。面白く、ユニーク、そしてためになる。世の中すべての勉強がこうであつたらどんなに楽しいことか。

これ以後、僕の月を見る視線が変わったことに月のほうでは気づいてはいまい。しかし、既成概念に新たな視点を与えることこそ何より大切なのではないか。そういった芸術創造の原点に思い当たることのできた点で、今回は何よりも充実したものを感じた。押しつけられていないのも功を奏していたらうし。

全天球型シアター地球の部屋

編まれた竹に覆われ大きな繭の形をしているのが、日本代表・長久手日本館。竹という自然の利用は涼しげで純和風感、満喫。日立に続いて並ぶ時間が長く、150分ほど。でも満足感は十分。

ZONE① 200枚以上のスクリーンで地球環境問題を映像化。

② 動く歩道で移動。60年間の歴史を振り返る。懐かしい生活用品が並べられて会話も弾む。スーパーマリオですらもう懐かしかった。それから印象的なのは応接間に鎮座ましましていた大ステレオセット。えへん、とかオッホンといった感じであったものだ。記憶をくすぐられる。また、同じ風景の定点観測も興味深い。それまで農道だったのが同じ湾曲をとりながら、闊歩するOLの姿に変わるのだ。同じ場所が田舎から都会へ。我が国の進歩を実感する。

そしてメインの360度包まれるシアター「地球の部屋」。直径12.8mの球体の中央に一本の橋が架かっていて、その橋の上で映像を見る。四面楚歌ならぬ上下左右斜めすべてが映像。まさに映像に包まれているという感覚。海の底を漂い、急上昇。空へ飛び立ち、いつのまにやら空から宇宙へ。そしていままでいた地球を自らが見ている立ち位置に。飛んでるような錯覚。飛び立つときの疾走感というか、スピード感も抜群で、実際に自分が高速移動しているかのよう。いわば『トータル・リコール』の世界。映像は少しぼやけた感じがまたリアル。停車場。止まっている電車でふと窓の外を見る。動き出す電車。ドキリ。まだ発車時刻には間がある。ああ、動いたのは隣

の列車か。あの錯覚。全身で体感。観る場所も関わってくる。一見さんの自分とは違い、リピーターは、橋のところで端に寄っていた。一休さんか。「なんだ真ん中が空いているや」とこのこセンターに進んだ自分であったが、360度を体験するためには、隅々にまで一度に全体に目を配れる端っこのほうがいいのだ。一休さんは偉大だ。愛知のヒーローはイチローさんだ。

シアターの映像は3パターンあり、このとき自分が観たバージョン1は空、海、山、そして宇宙からみた地球。2はオーロラ、星空、森、虹。そして3はイルカ、海、卵の中から生まれる雛鳥の目線、サバンナから海そして宇宙へ。

そしてZONE③ 広大な森。映像がぶつくと終わると、大きな広場に。竹のようなオブジェは紙でできていて、約千本。これらが表現しているのは、森の一日。音や映像の演出を駆使し、15分で森の一日が表現される。香りは屋久島の森林の香り成分がふくまれているそうだ。また、淡水魚のコイと海水のタイが共生しているが、こんなありえないことまで可能にするナノテクノロジーの力を感じる。とにかく、さりげない以上すげえ以下の驚きにあふれていた。

《待ち列百態》

待ち時間の長いイライラはいろんな場面を生み出した。この長久手日本館では、母親を求める幼児（推定4歳）の絶叫がごだまして、祖父母がオロオロ。母、やっと登場の際、行列全体が安堵して一体感。JRでは小突き合いから殴り合いに発展した小学生姉弟を見た。

群読叙事詩劇

演劇だけではないのか。これが最初にして最大の疑問。

①まずは1階のプロローグゾーン。ここでは7分間、和紙のスクリーンに映像が映し出される。中身は日本にある自然の美しさや、工芸品の美しさ、そして日本人が作り出した文化。文字、陶磁器、伝統芸能など。回る駒や風車の映像。色が溶け合う美。止まればまた別の美。一本調子ではなく、メリハリもテンポも良かった。加えて、ある世代には、いわば原体験や原風景を喚起させるのではないか。自分より上の世代だろうけど。

②続いて2、3階を吹き抜けにして作られたシアターへとエスカレーターで。円形シアターでは群読・叙事詩劇『一粒の種』が上演される。NODA MAPの北村明子がプロデュースし、元・天井棧敷現・万有引力のJ・A・シーザーが脚本・演出・音楽・美術を担当。演じる役者は赤組と青組に分けられ、一日交代で33人が舞台上がる。一日約20回公演。しかも185日の会期中毎日上演なのだから、一日5時間ステージ。一日おきでもかなりハードだ。同じ繰り返しだし。

まずはしっかりと客が通路に足を出したり荷物を置いたりしないよう、やんわりと注意。ここで通路を駆け巡ると想定される。そのとおり駆け込んでくるふたりの役者。見えない（無対象の）毛筆で、何かを大きく書く。続いて来る開演だ。多くの役者。正面ゼリフも円形だから違和感なし。「変わらないもの、変えてはならないもの、

変わるべきものは、激しく変わり、変わってゆくがゆえに、続いていくのだ」と群唱スタート。後ろの壁に出されるイメージ映像はまさに寺山演劇の世界。映像の前、客の後ろでも役者が叫び、芝居ならではの立体感。香具師の口上、にらめっこ、がまの油、祭のかけ声などに加え、なんといっても大迫力なのは宮沢賢治の「雨ニモマケズ」。ただ音読しただけでグッとくるこの詩が、映像・音響とともに生身の役者の肉体を通してグイグイ迫ってくる。「ソウイウモノニ、私ハ、ナリタイ！」。最後は1月から順番に季節感を謳いあげる。「朱の赤と艶やかな絹を思う（1月）、手で漉かれた和紙の白さは（2月）、まさに聖なる雪のごとく、その紙衣の奏でる一千年の文様（3月）艶紅、烏梅、寒紅、柳桜をこきまぜて（4月）」と続き、ラスト、リビートされる12月の「浄らかなる白を求めて」は圧倒的かつ荘嚴な余韻を残す。男は坊主、女はオカッパ。いかにもアナログでアナログ。時代錯誤と批判は容易。だが、環境がテーマとはいえ全体にハイテク、デジタルな博覧会の中で異質の勝利。特異こそが特長。

③終演後、4階のアートギャラリーへと通される。ここでは数え切れないほどの色鮮やかな風車が、風と戯れ①と連関。なお、群読はテキストあり。暗誦だから群唱ではないか。最後にして今なお続く疑問。

また、ガチガチの舞台パフォーマンスは数少ない。ちゃんと演劇部員には見せておくべきだったようにも思う。それも、なお続く後悔である。

特殊スクリーン ミスト付き

アメリカらしい豊かな活気やアメリカンドリームの原点を、垣間見ることができた。特殊スクリーンのシアターも凝った造り。雷雨の場面では、少量だが水滴が降ってくるなどの演出もあった。

①入口では全員に対し、金属探知機による荷物検査。空港にあるような本格派。これって、各ゲートでの荷物検査を全く信用していないということ。確かに、この万博会場でテロの標的になるとしたらアメリカ館だろうから、しかたのないことともとれる。

②映像展示。アメリカ建国の父のひとりベンジャミン・フランクリンが案内してくれる。稲妻が電気であることを発見した彼にちなみ、エントランスには稲妻をイメージした光る壁。手を触れると、その稲妻の形が手に合わせて変化。仕組みはよく分からん。ブッシュの挨拶も掲げられていた。最初の部屋ではフランクリンの肖像を前にして予備知識を伝授される。いかにも本場のヤンキー兄ちゃんが流暢一步手前の日本語で説明。好感を抱く。その後、メインシアターへ移動。6面の特殊スクリーン。フランクリン自身が映像の中に出てきて「フランクリン精神」について語る。あちらからこちらへ。

実に立体的。シアターでは、雨が降ったり、雷が光ったり、重低音とともに椅子が振動したりと迫力満点。映画館のセンサラウンドやウィンブル・シートを思い浮かべる。東京デイズニーシーのストーリーライダーも似た感じらしいが僕は未体験。

③シアターを出ると、ライト兄弟の飛行機や火星探査機のイミテーター

ションなどが展示してある。その他にも、火星や土星からの映像が直接NASAから送られて映されていた。

フランクリンには後悔していることがあると言う。それは「生まれてくるのが早すぎた」こと。もっともっと進化した世の中を見たかったというのだ。高速で動く乗り物や超高層建築。IT。写真を瞬時に海外に送る。しかし、明るい未来かというところ……。フランクリンはそんな私達にアメリカ流の4つのキーワードを与えてくれる。それは、「自由」「希望」「探究心」そして「楽観主義」。

とはいえ、当然のことだが、環境に関する展示があっても、アメリカ館では京都議定書については一切触れられていない。そしてパピリオンの多くのスタッフは、一人用の乗り物、セグウェイに乗っている。例の重心を移動するだけでゆったり進むやつだ。実際にセグウェイを見るとすごく未来的。静かで便利。ちょっととした移動には最適。でも「のたりのたりかな」。

「こいの池ナイトイベント」がつまらなくて走った当日最後の上映会で、超満員の中で見えた。最後は豪華パンフも。でも、ここにもブッシュの挨拶に多くは広告。僕の中のマイケル・ムーア魂に火がつく。

ちなみに「こいの池……」とは、シーモンキーが池の中央のウォータースクリーンに映し出され、他にもいろんななしかけで池全体をステージにするというもの。舞台演出家の作品だし、注目をしていたが、途中で断念。いい観覧場所を確保できなかったこともある。ストーリーは感覚的なもので、周囲の評判もあまり芳しくなかった。

古代ギリシャのブロンズ像「踊るサテュロス」

テーマは「イタリアン・ライフスタイル」。蒼い地中海を中心として、イタリアの美、芸術、文化を感じ取ってもらおうというコンセプト。

外壁には06年トリノ冬季五輪の案内というか広告。夏季にくらべるとやはり地味なせいも、あまり盛り上がりがない。見ている人も少ないようだ。

①最初のゾーンは「生きることの喜びと生命力あふれるイタリア」。水を中心にイタリアに関するオブジェが配されている。特に説明も無いので通り抜けるのみ。とはいえ、説明過多ともとれるパビリオンが多い中、自由な意図は感じられる。美術館だって大体はタイトルのみ。万博とはいえ、いらん説明が多すぎるのだ。館内は床が限りなく透明に近い青のアクリル板。その下に水が張られていて地中海のイメージ。とても涼しげでいい感じだが、ちょっと怖くもある。他にも、さりげなく高価な美術品が散りばめられていたらしいが、特に気づくことはなかった。気づかれなくて困るのはデメリットでもあるのだ。

②そしていよいよイタリア館の目玉「踊るサテュロス」像。このブロンズ像は、1998年にイタリアのシチリア島沖で引き上げられたもので、二千年以上前の古代ギリシャで作られた像と言われている。高さ約25m、総重量108キロ。二千年の間、海に沈んでいたこともあり結構ボロボロともいえる。よく運んできたなあ、像その

ものよりも、日本で展示されていることが感慨深い。第一級の美術品であり、国外出展は最初で最後といわれている。360度ぐるりと回って見ることが出来る。躍動感と荘厳という相反する言葉を同時に実感できた。サテュロスは神様のお供の者とされていて、髪を美しくみせる技術も高い。後ろの腰のあたりに穴があいているが、ここにはしっぽが生えていたと思われるそう。紀元前にこんなアクティブなフォルムでダンスするさまが描かれるなんて、驚きである。いちばん近いのは、走り幅跳びでジャンプして体を目一杯反らした瞬間か。また、ひっくり返すと名古屋城のシャチホコにも。これが出品の理由？ まさか。照明の角度が刻々に変わって壁に映し出されるシルエットが美しかった。色彩もフォルムもとてもかっこよかった。

ものものしい制服ガードマンが我々をねめつけている。本物、貴重品であることを実感。やはり、期間限定のお値打ちものを間近で見ることこそ「万国」の「博覧会」の楽しみ。

③最後はイタリアの文化や伝統の紹介と、イタリア各地の出品が並べられている。

サテュロスの本物の力がとにかく決め手であったといえるだろう。なかったら、はてさて。

本邦初公開、禁断、門外不出、不世出、正真正銘。いろいろと冠をかぶせることができる芸術品。逆に何もないところでどれが本物か見極めるといわれたら困ったろう。そこまで目利きでもない。適切な説明は必要。宣伝・広報活動は大切なものだと思います。

二重スクリーンとテク人

いちばん参考にした『びあ』のガイド本ランキングの中で、33位。このパビリオンが幾多の外国パビリオン中、ベスト30入りしていない点は、にわかには信じがたい。気のりしてないようすの外国パビリオン中では気合は十分に入っている。

この館の名物に「テク人」がいる。背中にパソコンを背負って、頭上にディスプレイが出ている姿。アニメにでも出てきそうだし、実際、ディスプレイにはアニメチックな原色だ。周りはいろいろ話しかけている。待っている（この日は40分ほど）あいだ、僕のデジカメにカメラ目線をくれた。そしてナビゲーターの紹介があり、いかにも北米というお兄さんや、まったく日本人顔の女性（あとで中国系と紹介あり）のときは失望（の雰囲気）もあつたりした。僕はその中国系の女性ナビだったが、ナビといっても最初のモニターへ連れていくところまでが主な仕事。入館時は、係のお兄さんとハイタッチして通過。入館人数を数えているが、肌の接触は一体感。心地よい。そもそもこの万博では、客にめったに外国人の姿を見ない。同じことを奥田英朗も週刊文春で書いていた。

地球圏、生物圏、民族圏という3つのテーマからカナダの多様性を描く。中は映像が2種類。同心円が2周。まず外周①、次に内周②、いずれもカナダの豊かな自然の風景と、6人の現代カナダ人の生活。生物学者や「赤毛のアン」の女優など。たとえば都会のマンションでの朝食、荒海を行く船、雷鳴。小さいモニター①の部分

（14インチぐらい）は透明な布がフィルターとして覆われており、映像も照明によって微妙に雰囲気を変えていく。②に移動するとスクリーンが巨大になり、①の客も風景として溶け込むことになる。なんとなく、メインテーマである多様性というものは窺える。豊かな自然と、都会の生活の並列。ストーリー性がないドキュメンタリー的な羅列ながら、単純な展示よりはずっと面白いといえる。もちろんそれ以上のものでもないけれど。また、プレショー①の映像にメインショー②の映像が重なるため、同じものを2回見させられる印象は否めない。もっと興味を喚起するものならともかく。

ほとんどのパビリオンはあまり外には出て行かない。しかし、ここはテク人の存在もあり、どんどん外に出てアピールし、何かと客の世話をやき、気さくに振舞っていた印象がある。入る前にも何度かすれ違ったし。「なんだアレは？」。これも前回2000年のバンクーバー博の開催地だったからか。はたまたこのグローバルコモン2の端で大きなメイブルリーフ（カエデ）の国旗の模様のオブジェが広がる、いちばん目につきやすいところにあるからか。少ない予算で頑張ってる。決して悪くない印象。

《気になったことば》①

「笑った・遊んだ・汗かいた。食べた・歩いた・体験した。聞いた・話した・ふれあった。知った・学んだ・考えた。出会った・見つけた・感動した」――閉幕直後に出た「中部びあ」写真集の帯より。何よりも動詞の似合う博覧会であった。でももはや過去形……。

2種類のエコロジー立体映像

海上の森にある瀬戸会場。海の上というには、あまりに遠い。この読みには2つのいわれがある。A開所の当て字。Bじつは大昔は海上であった。

この森の四季の表情やさまざまな生物の姿を迫力ある特殊映像と世界初のサラウンドシステムで体感するシアター。

①最初はライブラリー空間「森の書斎」。ここでは愛知県内で絶滅が危惧されている生物たちが紹介されている。かつてはこれらを絶滅に追い込むような万博計画を立てていたのだから、皮肉なもの。待つ行列が幾重にも折りたたまれて覆う。並びながら周りを見てくたさい、のようだが、列を自らコントロールできるわけもないので、ちょっと無理。列の途中で途切れ途切れに眺めるのみ。

②続いてギャラリー空間「森の劇場」。海上の森を体感できるシアター。2年間にわたって海上の森を記録した映像である。正面に立体スクリーン。両脇の補助スクリーンが補足的かつ立体感を強める。ただしアンチCG映像が中心。まずは万博の計画変更の変遷について語られている。森を残そうと決めたこと、工事作業は天然物に最大限の配慮を行うための小冊子も。たとえば、工事現場に動物が現れたら、保護するための穴まで確保したとか。「虫の目」では、虫の目線で生き物の姿を大迫力で。そして『森の一瞬』では四季折々の海上の森を表情豊かに撮影。作品はこの2種類があり、交互に上映されていた。両方とも鑑賞。プロ（エビ）ローグは同じだが、虫

中心の前者と森の風景中心の後者となっている。「かつて聞いたことのない森のシンフォニー」では、実際にゴボッゴボッという、コナラの木が水を吸い上げる音が印象的。他にも、台風るとき、木々はこんな音を聞いている、というような録音も。「コナラの木の物語」。この瀬戸愛知県館を建設するために、どうしてもコナラの木を一本切らなくてはいけなくなった。しかし表向きには自然の叡智をテーマとしているため、その建前を守るために木を切らずにパビリオンに移植しようという話になる。20mもの木を生かしたまま移植する。世界で初めてのプロジェクトだという。数々の苦労の末に移植は成功。映像や音楽に合わせてオペラ歌手（コナラの精）が実際に唄う演出もある。ソプラノは冒頭と最後に登場。手を差し伸べるとスクリーン下の壁が開き、次の③「森の回廊」へと案内する仕組み。そのコナラの木は、シアターを出ると吹き抜けて見ることが出来る。他には愛知県内の小学校による工作の展示。いらなくなつたフィルムケースなど、リサイクル品を材料にして模型の昆虫が作られている。

④「森の繭」には絶滅種ニホンオオカミやニホンアシカなどの標本も展示されていた。オオカミのガラス玉のような瞳にはクギづけになった。つながりはよく分かるが、面白さの点ではいささか心許ない。

なお、瀬戸会場には8位の日本館とここしかない。せっかくゴンドラで来たのに、という声はサイトでもよく聞こえた。海上広場で遊ぶ余裕やのんびりする気ならともかく。分散は必要だったはず。

炎のマジックショー 映像とライブの掛け合い

登場人物は、津川雅彦演ずる大魔術師の火村大源^{はむらたけげん}、古田新太演じる元弟子の燃八^{もんぱち}、そして現弟子・コージ。

①プレショーエリアは、このシアターの楽屋裏という設定。大画面には館内の防犯カメラ映像が魚眼レンズで。待ち時間の映像はあらかじめ作ってあったものが短く、リピートが続く。ちょっとシラける。

今日は万博で行われる『炎のマジックショー』上演日。主役は、炎のイリュージョンで世界に名高い大魔術師。だが開幕間際になっても、大源は会場に現れない。舞台裏でオロオロする弟子のコージ。何やら怪しげな警備員が登場。コージに大源の代役を務めるしかない。なぜなら、「今日の公演はどこかな？」とコージに電話がかかったとき、燃八はコージになりすまし「お台場ですよ」。破門を恨む燃八が警備員に化けていたのだ。刻々と迫るショーの開始時間。どうする、どうなる？

②ストーリーの説明が終わると、映像の燃八に案内されシアターへ。シアターではまず、初めて登場した実物のコージがマジックを披露。初めはちゃんと火を使ったマジックをするのだが、まあ初級者並み。そしていよいよ大きな技に、というところから、なんとその火が「実際の火」から「映像の火」に変わる。子どもだましなマジックふうの映像ショーに墮してしまふ。大源と燃八は映像のみ。目の前で演じるのはコージだけ。映像とライブの掛け合いといえば聞こえ

はいが緊張感は乏しい。炎のイメージ映像に合わせてコージが歌い踊るのみ。マジックではなく、マジックシアターという設定のショーだけ。最後はまた本物の火を使った「炎のマジック・最終奥義」披露になる。でも、歌とダンスにあわせて、制御された実際の火がガスコンロのように。おそらくは下に鉄板のパネルが複数あって、縦横にパネルを抜き差し操作して火を制御しているのだろう。あくまで僕の推測だが。

「フrintト・ファイアー・フゥ！」の呪文を、恥ずかしがらずに声を揃えて僕を助けて、とコージが言う。観客参加だ。しかし、感動に乏しい客のノリは薄い。でも2回目には「アリガトー」となる。予定調和。しかもこのコージは7人いて、細かいギャグなどに外れもあったそうだ。サードステージに出演したことのある本郷小次郎もいたらしいが、自分のときだったかは不明（彼のブログは面白かった）。帽子に眼鏡で途中、歌舞伎のような2役のタミーもいて、いわゆる個性を殺した扮装になっていたのだ。やっと大源登場。ただし映像。燃八の野望、ヒゲとともに消える。これも映像。独り立ちしたコージ、火とともに喜びの歌と踊り。ここは実演。これでポヤ騒ぎもあったなんて信じられない。

③展示ホールは、ガスによって作られた雪が降っていた。「ガスで冷やそう！ びっくりマシーン」だとき。

④屋上には展望広場があり、場内を見渡せる。このパビリオンが面白かったら、一望しつつ余韻にひたるところ。しかし、それ、次の館へ。

600インチと世界のたからもの

ブルーホールに続いてもう一度、マンモスを、と今度はオレンジホール経由の整理券。グローバルハウスは自ら選べない。2回並んで1回ずつ。ラッキー。

①待っているとき、まずその列をハイビジョン撮影。あとで列の間にある赤・青などの球を目印に自分の姿を見つけることができる。

②こちらは大画面ではなく、超高精細映像システム、600インチに立体音響のNHKのハイビジョンシニアター。画面自体はさんざんいろんな大画面を見学をしたあとだけにさほど感心しない。特にブルーホールの舌を巻くほどの迫力にはかなわない。仏像の顔。雪の付着したクローズアップや鼻の割れた姿。画像がともきれいで驚かされる。ただし、ハイビジョンといっても視力の悪い人には違いはよく分からん。それに立って見なければいけないので疲れた足には辛い。ラストに流れる夏川りみ『ココロツタエ』が印象的な程度。展示室へ移動する際、抽選でマンモスとの合成新聞を作ってもらえる。もちろん外れる。

③つづく展示は耳に当てるセンサーによる荒俣宏の解説付き「世界のたからもの」。これはアイミュレットという小さなカード状端末。いたるところに赤い光を放つ2本の金属棒が設置してある。赤い光は赤外線で、このアイミュレットはその赤外線を電源とし、なおかつ赤外線を音声に変換して人間の耳に届ける。その後はショーケース展示。ここで先ほどのアイミュレットが威力を発揮する。展示物

の解説・ナビゲーションを受けるのだ。自分のペースで観覧できるのでうれしいのだが、感度は悪いし、あの鼻のワキのほくろ顔がアラマタって感じで浮かぶのは……。テーマは「人類の想像力」。それ行け、という感じでいろいろ集めたごった煮感あり。人類の誕生からマンモスとのかかわり、街の誕生、蒸気機関、ロケット、そして未来へと展示は続いていく。ここには、月の石もあった。原始人トゥマイの骸骨とその模型が並んでいる。実物の横の模型には実際に触れるのだ。

思えば、35年前には、無理だろうと回避した「月の石」がこんなに簡単に、という感慨はたしかにある。宿願、達成？ しかし、今回は最後のアポロ17号（1972年）が持ち帰ったもの。小四の自分、のちにこんなかたちで見られることをどう思っているだろう。ただ、まあ、ナルホド程度。富士山の麓に行けばいくらでも見られるよ、こんな火山岩。黒くてちっぽけな、大きめのカリントウ。ここで最後にマンモスが来る。マンモスラポである。しかし、2回目ではそれほど。やはりベルトコンベアが速すぎないように思われてならない。

SONY中心の超大画面「ブルー」にNHK超精密「オレンジ」は明確な判定負けといえるか。画面の大きさは致命的に思えた。

また、初モノという威力は、冷静な判断とは遠いものである。そのあたり、オレンジホールは割り引いて考えてあげなければならぬ。それにしても、マンモス単独観覧では「あっというま」すぎて逆に感動は目減りしすぎると思うのだが。

《15位》ロシア館 71点

DISPLAY

マンモスと宇宙船

マンモスラボにもあるマンモスが全身骨格で見られる。宇宙船の模型も。しかし、いずれも格落ち感否めない。

マンモスラボとの違いは、大きさと「骨だけ」である点。ベルトコンベアでなく、ゆっくりと観られるマンモスは一見に値する。しかし、一見に値しても目玉にならないのは、フライドチキンを考えてみれば分かること。骨だけじゃ、喜ぶのは犬だけ。人間様は、肉汁シズル感がなくては満足できない。もちろん、冷凍マンモスにもタラーリ肉汁はない。でも、レンジでチンすりゃホッカホカになるような「肉付け」の裏づけがあるのだ。こちらも牙は立派。骨格もぶつとい。それでもそれ以上に感動できない理由はそんなところだろうか。だいたい、マンモスはマモチャンとかいうキャラにまでなっていたし、瀬戸会場では、小さい骨を展示した「マンモスの牙ふれあいコーナー」なるものまで登場していた。マンモスづくしである。マンモスラボに展示されている冷凍のマンモスも、ロシア連邦内サハ共和国で出土したものが、このロシア館にはマンモスの全身骨格標本と、マンモスの模型が展示されている。骨格標本も同じくサハ共和国で見つかったもので、高さ27m、長さ48mを誇る。1万から1万2千年前のもので、推定年齢は60歳だそう。牙だけでなんと重さは100キロもあるそう。

宇宙船も同様。マネキンの宇宙飛行士が操縦席に乗っている。精巧さは感じる。でも一瞥で終わる。人は巧みなイミテーションで

だけでは感動しないのだ。中身もしくは興味をひくフォルムだろう、展示ってやつは。全長6m、ロシア最新型の宇宙船の複製。宇宙といえばロシア、ロシアといえば宇宙。たしかにそういう時代もあった。人類初の宇宙飛行を成し遂げたのはロシア（当時ソ連）であった。宇宙船「ポストーク」から地球を見た宇宙飛行士ガガーリンの「地球は青かった」はあまりにも有名。展示されている宇宙システムで宇宙への観光旅行が実現する日は近いのかどうか。

《自然の叡智——テーマについて》

進歩と調和という熟語のペアリングなら、70年万博のテーマとして今もお僕以上の世代には焼きついていよう。今回は「自然の叡智」。なんとも難しい文字を使ったものである。「英知」ではなげいけないのか。違和感を覚える。だが気づくのだ。この引っかかりこそ、愛知だから愛・地球博という言葉遊びにも似た語呂合わせにながると。A I C H I で E I C H I。ダジャレっぽいあたりに、高度成長期のひたむきさと違って、「まあ、そう熱くならないで、肩の力を抜いて楽しもうじゃなか」という余裕を感じる。……といたら好意的な解釈にすぎるだろうか。

また、サブテーマは次の3つ。「宇宙、生命と情報」「人生の“わざ”と智慧」「循環型社会」。あまり知られていないが、入場してすぐボランティアの方から渡されるMAPの左肩にはちゃんと刷り込まれていた。終わってから気づいた。創る際、テーマは気にする。でも観ているときにはあまり関係ない。面白さ、のみ。

「山」スイス・アーミーのポケットライト

パビリオンの外壁に、国名よりも何よりも大きく書かれた「山」の文字。ずばりそのまま国の象徴「山」をテーマにした展示をしているといえる。

展示ルームに入る際、ものすごくしっぺりした扉を通り抜ける。どうしてこんなにしっかりと遮断しているのかと思ったら、なんとパビリオンの内部はスイスの山の気圧にしてあるというのだ。まずは気圧から山を再現。再現されているのはもちろん気圧だけではなく、館内にはコンピュータで描かれたアルプス山脈が立体的に絵で、確かに凄いが、なんか安いハリボテの装置のように見えなくもない。

山は美しいものだが、山と暮らすというのは大変だということが展示からわかる。登山列車の音を聞きながら乗車したイメージで展示コーナーへ移動する。手に持ったポケットライトを的にあてると、その展示物の説明を聞くことができる。展示物はスイスにゆかりのある品々。まず小さな四角い金属製の箱のようなものを渡される。見た目は強固な蓋付き懐中電灯である。実はこれ、音声案内システムなのだ。音声案内というとグローバルハウスのオレンジホールを思い出す。あちらは赤外線を音声に変換する技術を使ったものだった。スイス館の音声案内はどんなものか。山へと探検に出発。

まずその金属製の箱の説明がある。これはかつてスイス・アーミーが使用していた懐中電灯を改造して作られた物だ。展示物にはそれぞれ金属製の輪っかがあり、そこにこの懐中電灯の光を当てると、

懐中電灯の背中部分から音声の流れる仕組みになっている。赤いセンサーに光を当てると音声情報を取得するわけだが、懐中電灯にデータを受ける部分を見つけないと音がでず、どんな仕組みなのかは不明。軍事機密か。スイスというと平和なイメージがあるが、永世中立であるため、自国のことは自国で守らなければならず、実は高い軍事力を誇っているそう。そんなことまでこの懐中電灯は教えてくれる。「アルプスの少女ハイジ」が好きだという皇后陛下のモニターもあって、なかなか珍しい映像だと感じ入る。これも万博ならではのものか。だってTVですらなかなか皇室の人が感慨を述べることはないし。

《ITの威力》

有力パビリオンはネットで事前予約が可能。何度かトライしたが、解禁日でもなかなか果たせなかつた。超人気コンサート同様つながらず、つながったときにはすでに遅し。それより何よりITの威力を実感したのは携帯電話のサイトに各館の待ち時間がリアルに表示されていたこと。帰京してから何度も見た。ドイツ館180分、イェメン館0分。距離の近さで味わう21世紀の技術。

客の質問に答えてくれるロボットの美人(?)ガイドもゲートにいたそうであるが、気づかなかつた。やはり携帯電話という、もはや完全に我々の生活に入り込んでしまったツールの果たす役割の大ききには驚きを隠せない。手のひらにスッポリのこの機械、いったいどこまで行くのだろうか。

《17位》メキシコ館 65点

DISPLAY

スロープと大画像

薄暗い照明の中、大きな画像で、メキシコの広大な大地の写真を
見ることが出来るのはよい。やる気のない海外パビリオンと比べ
ると、工夫のあとは見える。

広々としたパビリオン内を、スロープで海・砂漠・森林・室内と
4つのコーナーを歩く。

メキシコというと陽気で太陽が燦々^{さんさん}と輝きサポテンと砂漠という
イメージを持っていたのだが、それはこのパビリオンで大きく覆さ
れることとなる。パビリオンの入口では、メキシコの民族衣装を簡
単に着ることが出来る。ソンプレロ（テンガロンハット）を被って、
色鮮やかなマントを身にまといばすっかり陽気なメキシカン。入口
には、やっぱりメキシコらしい陽気なアテンダントがいて、テンガ
ロンハットを被ったモリゾーのパペットで挨拶をしてくれる。ラン
キングなどでも人気なのは、この陽気さのゆえか。しかし、灼熱の
太陽とサポテン、といったイメージを心で描いてメキシコ館に入る
と、そのイメージとの乖離にビックリする。暗い。まず全体的に薄
暗く神秘的な雰囲気醸し出している。

最初に登場する霧のカーテンには海洋生物が映し出されていてと
ても涼しげ。しかもその霧のなかを進む。館内はスペースが広く使
われていて、なだらかな坂道の両側にある展示品をゆっくりと歩き
ながら見るスタイルになっている。こういうスロープのスタイルは
北欧共同館もそうだが、いつのまにか二階にあがってしまい、なか

なか快感。霧をくぐった先にある海のゾーンでは、ウミガメやクジ
ラなどが泳ぐ海を体感できる。しかもパネル展示がどれも鮮やか。
まるで芸術作品を見ているかのようであった。

《合宿の実際》

そもそも演劇は劇作・演出・演技だけでなく、照明・音響・装置・
小道具・衣裳・メイクなども含めた総合芸術である。総合的な文化
の見本市でもある万博体験は、見学だけでも大きな意味を持つであ
ろうと確信し、関係各方面とも調整して準備を進めた。実際は8月
23日（火）から25日（木）の二泊三日。小牧市の旅館を宿舎として
高校7、中学18、顧問2の総勢27名。生徒は高校生を中心に原則4
名の班に分け、班行動を基本とした。事前計画。人気館にはネット
予約もままならない。

さて当日。初日は小雨時々曇りの天候も我々には幸い。夏休み中
でも一、二を争う客数の少なさ。入場も割とスムーズ。でも生徒は
なかなか人気館にはたどりつけない。やる気に乏しい外国館で意気
阻喪か。二日目、9時の入場時に間に合うように出かけるが、今度
は天気も回復し人も増え、また人気館は遠ざかる。ほとんどはマン
モスを体験したぐらい。あつけないという感想が多かった。最後は
予定外であったモリゾーゴンドラで瀬戸会場へ。そこでも地雷撤去
のイベントを横目に見た程度。でも、行こうって二度と行けぬ
場所に行った仲間たちとのささやかなディテールが今後花開くこと
を願いたい。

時速500キロを超える未知のスピード

3D以外にも「超伝導ラボ」など見るべきところがあったようだが、3Dシアターのみで満腹になってしまった。

①プレショーで紹介されるのは、鉄道の歴史。高速大量輸送が可能になった鉄道の意義と、飛行機の時代となった今でも存在価値は十分にあり、新幹線の時代を経て、リニアの時代へ続くといったストーリー。鉄道の歴史で3つのターニングポイントを挙げていて、そのうち2つが新幹線とリニアとかなり自信满满。鉄道の輝かしい歴史を紹介している。蒸気機関の誕生から東海道新幹線の開通。そして国鉄の分割民営化。確かに、日本の大動脈といえば東海道新幹線。

ここでは「リニモと超電導リニアを一緒にするなよ、あんなオモチャとは違うんだ(誇張した要約)」という念押し説明がある。

②メインシアターは3Dなので、立体に見えるメガネを渡され、800インチのハイビジョンに超電導リニアの映像。大迫力。空から、街角から、そしてリニアの車内から時速581キロを体感できる。音響もすごい。しかし、この超電導リニアは山梨実験線でしか走っていない。早朝、もやのかかる実験線に迫る超伝導リニアモーターカー。やってきたと思ったら、あっという間に通過。またやってきて、そして通過。またまた通過シーン、ときに併走シーン。途中、時速581キロの鉄道有人走行の世界最高時速をたたき出した記念すべきシーンなども盛り込み、これでもかと続くリニアの映像の連続。その短い距離を行ったり来たりする映像が延々と繰り返される。リニアが

浮上する瞬間や時速500キロ以上の未知のスピード感。もちろんアングルも違うし、演出もあるのだが、えんえんと続く印象は強い。最後の方はお腹いっぱい。これでもか、の映像が12分。ラストでやっとCGの女の子が客席に。

各パビリオンが地球環境をテーマにしている中で、ここまで自社製品を前面に出し、主張するこの館は異色といっても過言ではない。途中で眠くなる人が大半かもしれない。映像はCGを使ったおかげでウツクさくなってしまった。それはたしかに失敗であろう。

速さの表現というのは、じつは凄く難しいということを、我々はマラソン中継でもよく知っている。ほとんどが顔の見えるタテ画面。これではあまり速さは感じない。横でどう撮るかが肝心。このほうがスピードを実感できるのだ。映画『RAMPO』(黛りんたろう版)のタクシー場面も同様。遠景でタテで撮っていたら、本当にゆったりした感じにしかない。しかし速いものをカメラで「捕らえよう」とすることは速い分、難しい。もともと捕らえるのが難しいから速いのだし。

《2度目の愛知》

愛知県には新世紀になってすぐ、明治村の下見で出かけたことがある。やはり夏の終わりであった。暑かった。ダラダラと汗をかき、ねっとりとしがみついてくる湿気に閉口した。唐突な夕立でビショぬれというおまけまでついてきた。そのぶん木曽川の日本ライン下りは風を切り、爽快感バツグンであった。

色覚検査のような外見と「ドン・キホーテ」

パビリオンの外側に、黄色、オレンジ色、茶色、赤色と色鮮やかな六角形の陶器が1万6千個組み合わせられていて、幾何学状というか蜂の巣状に構成されている。太陽と情熱の国スペインを体感。と思ったら、この陶器の外壁は日差しを遮るためだとか。太陽の国なのに。いや、太陽の国だからこそ、太陽との上手な付き合い方を知っているのだろう。外壁についても少し。これはスペインの建築家「アレハンドロ・サエラ・ポロ」が設計したもので、スペインで作られた陶器の壁をパビリオンから1・5m外側に作り、外壁と陶器の壁の間に入場者を通らせる。混雑時にはそこに行列ができる。日陰で涼しく入館を待つてほしい。そんな知恵と優しさが込められている。

パビリオン自体はキリスト教の大聖堂をイメージ。中央のイベント空間では、常設ではないが、無料でオリーブオイルやワインの試食会などが開かれたり、フラメンコダンスが披露されたりする。フラメンコは見たかったものである。そうすれば評価もガラリと変わったかもしれない。

展示内容。「イノベーション」のゾーンでは、火星の生命起源を研究している宇宙生命学センターを再現。「実り豊かな大地」ゾーンでは、食べ物の彫刻が展示されている。やっぱりスペインといえればバレンシアオレンジ。そして「ドン・キホーテの世界」では、ドン・キホーテやスペインの古典文学について展示がされている。視

き穴形式で「ドン・キホーテ」のいろいろなバージョンを知る。覗くと挿絵や映画のポスターなどが見られるのだ。興味深いものもいくつかあった。レトロな映画ポスターの持つ独特の雰囲気も味わえた。大型スクリーンで松田龍平がナビをつとめる映像もあったらしいが、時間が合わずに観ていない。最後に「現代のヒーローたち」でスペインのスポーツ選手が紹介。最強のサッカーというコーナーには、レアルマドリッドにFIFAから贈られた20世紀最優秀チームトロフィなども展示。サッカー以外にも、F1の展示もある。いちばん印象的なのがやはり「ドン・キホーテ」なのだが、スペイン・ドン・キホーテとはあまり思えない。いくら2005年が完成40周年といっても。まあ、そんな切実ではない理由付けは説得力に乏しい。そのあたり、メインの持っていく方を誤っているようだ。

とにかく、外見のユニークさに惹かれることは間違いないパビリオン。実際的な人気はこの周辺では他の館のほうがずっと上。たとえばドイツ館などは容易に入ることではできないのだし。僕も何度も同じアングルで写真を撮ってしまった。最初は気づかなかったが、別の日にはほぼ同じところから撮ってしまったのだ。それくらい印象的。まるで色覚検査。

《暑さ対策》

ミストで体温を下げる試みが各所に。中でもグローバルハウス隣のバイオラング。草が縦に植えられて長さ150m高さ15mの巨大な緑化壁に。酸素供給、気温降下の森林浴効果あり。時に満喫。

大型天空スクリーン

なんといってもこのパビリオンはパビリオンの意図からしてユニーク。市民団体としてNPO、NGO各団体の紹介などが入っている。その意味では瀬戸会場の市民パビリオンと同じだ。もらったパンフに

「地球上、トイレを持たない人は64億人中20億人もいる」。ふむふむ。しかし、とにかく何よりメインはアースドリーミングシアター。

アース(大地)に横になって直径10mの大画面を見上げる。どうしたってドリーミングしてしまうのだ。真ん中が畳敷き、上にはその映像。その外周の椅子もほぼ180度のリクライニング。見せる意図はほぼないと言ってもまったく過言ではないだろう。誰がこんな映像を見て、眠気を感じずにいられるものか。音楽もいわゆる環境音楽って感じ。低音で、さざ波のようなうねりを繰り返すばかり。画面でも、宇宙の星々や地球の総人口がパタパタとめくられていくデジタル数字。その動きがまた眠気を誘う。睡魔。この場合、「魔」は悪い意味ではない。心地よく、休息の「間」を与えてくれる。

僕も、混んでいたため最初は外周の壁に背中をつけて寄りかかり、少し空いたのでリクライニングへ。そしてチャンスを見て中の畳敷きへ。ほとんど噂に聞く飯場の雑魚寝状態だったが、仮眠。靴を脱いで横たわる完全休息。いいリラックスタイムとなった。他にも日本庭園など靴を脱いで上がれる場所はいろいろあったようだが、こしか休憩することはできなかった。

何より、その効用としては、ここで体を横たえる休息がとれたために、3時間並びっぱなしの日立グループ館に行く元気がわいたこと。小一時間は休めたのだ。夏の見学は水分とともに足の体力を確実に奪い取る。そういう意味では、このパビリオンはものすごい威力を発揮したといえよう。しかし、本当に休息場所という理解されることを主催者側は望んでいたのだろうか。疑問は消えない。

このゾーンは、総称が「遊びと参加ゾーン」である。ロボットステーションもわんぱく宝島も子供向けの遊園地。後者は特に子供だましもはなはだしい。他には、有料の観覧車もあった。乗ることはなかったが、場内にいる間じゅう、時間のデジタル表示やキャッチーなアニメーションで楽しませてくれた。加えて、「水木しげるのゲゲの森」という、この博覧会で唯一ファン意識を刺激してくれる場所もあったのだが、単に鳥取から遠征してきた水木グッズの売り場にすぎなかった(それでも写真を撮ってしまうあたりがファンである)。ここまで来たら、模図かずのお化け屋敷があってもよかったのではないか。でも、そうなるといよいよ後楽園ゆうえんちになっ

てしまう。

また、この近くのグローバル・コモン5の脇には、「同じ顔記念写真」など自分の顔面同時多様メイク写真で有名な澤田知子の作品が掲げられていた。専売特許の同じ顔シリーズで、タイトルをつけるとすると「やっぱりいろいろな肌の自分」か。黒塗りや金髪など、やはりいつもの澤田七変化が異様な迫力。パビリオンにいい意味の毒気を与えていた。

「地球タイヘン」大講演会

グローバルグループからこの建物を見ると、奇妙なクレーン車みたいなものが見える。愛知県館の屋上に設置された「踊る指南鉄塔」というモニュメント。これは、愛知の伝統であるからくり人形の技術と最先端の技術を融合させたもので、1時間に2回鉄塔が動き出すという。そして中央の巨大提灯からは、からくりも登場。グローバルトラムに乗って説明を受けているときに実際に開いて動き出した。「お客さん、ラッキーですよ」的なアナウンスをされた。他にも祭りの山車だしが展示されていた。

メインの「地球タイヘン」大講演会は、講演会を模しているが、まあ演劇と呼べるステージパフォーマンス。講演するのは江古野守博士エゴノモリ。もちろん架空の人物で、映像ではなく役者が実際に演じる。内容は、温暖化によって地球は破滅するというもの。前説は「毎日、毎回違うので、これだけ聞きに来ている人もいますよ。地球タイヘン……第三千何百何回……」と言っていた。とはいえ、同じことを段取り外さず毎回繰り返す。大変なことである。場内が暗くなり大きな音とともに火花が散る小爆発。火がついたように泣き出した女の子（推定4歳）がすぐ近くにいたので、ホント気が散った。パフォーマンスも「悪い」予感が当たった」と言って笑いを拾ってはいたが、一回勝負のステージでは致命的。ライド物でなくても、未就学児には不向きなものにはそう表示すべきである。アテンダントもおろおろ。

1991年にアルプスの氷河で発見された5300年前のミイラ「アイスマン」。なぜ今になって姿を現したか、それは温暖化によって氷河が溶けたからという皮肉。ほぼ骨だけのアイスマンがCGで肉付けされて語り出す。環境破滅、地球滅亡という話を展開する博士は、アイスマンにこう促される。「絶望ではなく未来を語りましょう」。温暖化によって地球は破滅するというシナリオを語るのではなく、それを防ぐには我々はどうしたら良いのか。今ならまだ間に合うという展開になっていく。講演会というスタイルでありながら単調ではない。博士が宙乗りするというフライング演出。回転までする。松明たきなど特殊効果もあり、20分間のライブパフォーマンスは火・水・光・音が上手く使われる。ただし、エフェクトもストーリーと連関してこそ。とってつけた感じ。最後に江古野博士が紙で作った桜の花びらを風に乗せる。また、愛知県出身者や愛知で働く技術者達からの映像メッセージ。その人々のなかで最初に出てくるのは中日ドラゴンズの岩瀬仁紀投手。やはりイチローではなくドラゴンズの選手なのか。

講演会の後、出口には「モノづくりギャラリー」と題された幅25、高さ7mの黄金絵巻。愛知県の過去、現在、そして未来の産業が紹介されている。

これも舞台パフォーマンスのひとつ。でも、少しでも教訓めいたことを強調されると、ひいてしまう自分がいた。日立など楽しさ優先だから大丈夫だったのか。まったく教壇に立つことの難しさを感じてしまった。宿命と割り切ることは、簡単にはできない。

電車型ライドで8コース

小学生が描いた「私たちの夢」「地球の未来」をテーマにした絵を外壁に使用。無機質な装いの多い館の中ではユニーク。エントランスから館内へはレンガの壁やアーチが天井を支えるレトロな雰囲気。大人にとっても旅情をかき立てられる演出。マスコットキャラのふくろうの名からフク丸エクスペレス。4両編成の電車型ライド。色は赤青黄緑の4色。遊園地などによくある、展示物に向かって向きがクルクル変わる座席。天井も開いて、さまざまな角度から音と光の演出を楽しむことができる。

まずは遠い宇宙の果てへと出発。最初の3シーンは科学技術ゾーン。①万華鏡トンネル。まず最初にライドが差し掛かったのは、一辺6×長さ25mの巨大万華鏡。大地の塔よりよい。ライドは急坂を登りカーブにさしかかり、乗っているこちらがフラッシュ撮影される。②銀河の駅。ブラックホールをイメージした展開を抜けると、無限に広がる宇宙空間の世界へ。この万博のテーマであることもあり、多くのパビリオンで見られる地球。ここに登場。宇宙の果てから、次第に人工衛星が周囲を回る青い地球が見えてくる。徐々に近づき、なぜかUFOが飛ぶ伊勢湾上空へ。さらに会場へ。ここだけは本物の景色。地上15mにあるガラス回廊から、長久手会場を一望。③天空の駅。館外から見えるアピール満点の部分は、解放感もあり。外観が重なるというのは面白いアイデア。見られることは見ていること、というあたりまえの事実に気づく。次の3つは自然との共生

ゾーン。④珊瑚の駅。海中では古代船や魚が登場。⑤ふくろうの駅。いきなり真つ暗になる。⑥は、このパビリオンで最も印象的だった四季の駅。春のピンク、里山の森の色が緑で夏。紅葉で秋、白で冬へと変わる不思議。照明によって色を変える里山の風景は、四季をイメージした日本の原風景。最後の2シーンは人の心ゾーン。⑦は祭りの駅。大音量のかけ声に笛。雰囲気は一気に盛り上がるクライマックス。日本各地23の祭を再現。ねぶたや仙台七夕祭、岸和田だんじり祭などにぎやかな祭りの中を、ライドがゆっくりと進む。想い出のひとつ、能登の後陣乗太鼓もあった。⑧は明日への感動スマイル。最後は感動の笑顔と出会うひと時の旅のエピローグ。途中で撮られた3枚の写真が大スクリーンに表示され、画面いっぱいになり、自分の顔など複雑な表情だ。ライドは元の旅立ちの駅に到着。全長300m、約10分間の旅は終了。

「地球と人と夢、この素晴らしい世界」というテーマだが、盛りだくさんすぎてそれぞれが薄味すぎるし、後ろの客の本来禁止されているフラッシュ連発で集中できず。当日最後の見学で体調も疲れたピークにあり、あまりよい印象はない。外壁でアピールしているとおろ、子供向け。

やんわり注意するべきだったんだろうか。でもまあいいや、って気持ちになっちゃったのは、やはり本来の展示物にそれほどの思入れがなかったんだろう。それにしても行列。傍若無人な大衆はよく見かけた。太宰治のことば「家庭の幸福、諸悪の元」。実感。

《23位》オーストラリア館 54点 DISPLAY

レプリカであっても巨大カモノハシ

データの森は、80のプラズマディスプレイが縦に積み重ねられた柱。先住民アボリジニの生活など。最後のエリアにカモノハシの巨大模型。オーストラリアのみ棲息の、6万5千年前から変わることのない生物だそう。12mと本当に巨大。顔の部分をすべり台にして幼児が楽しそうに大汗をかいている。カモネちゃんとして、キャラクター化されて大人気。オーストラリアコアラはもはや古い？しかしパビリオンはもはやお遊戯の場となっていた。

《他のランクとの比較①》

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1										
瀬戸愛知県館	カナダ館	イタリア館	アメリカ館	瀬戸日本館	長久手日本館	三菱未来館	日立グループ館	三井・東芝館	韓国館	アルゼンチン館	ブルーマンモス	《他のランクとの比較①》	ぴあ	桃太	トッ	よか	優樹	サイ			
-	33	9	23	3	5	15	1	6	8	-	17		17	4	33	3	3	32			
-	10	-	7	-	1	8	(1)	3	5	-	4		9	9	41	-	23				
86	86	9	24	17	17	3	1	9	-	9	33		41	46	46	41	23				
13	49	6	27	1	14	2	28	43	46	41	3		46	46	46	41	23				
-	-	13	-	-	3	5	2	6	-	-	3		6	6	6	-	23				
65	78	13	9	2	5	10	1	4	17	23	32		6	6	6	-	23				

13 ガスパビリオン

14 グローバル・オレ

15 ロシア館

16 スイス館

17 メキシコ館

18 JR東海

19 スペイン館

20 地球市民村

「ぴあ」：もともと参考にした出口調査によるランク。原則30位まで。

「桃太」：桃太郎のサイトで10位まで。()付き数字は小学生に聞いたランク。「トッ」：トッピーは全パビリオン得点評価をランクにしたため、同順位が多い。百位以下切り捨て。「よか」：サイトのよかったパビリオンランク。パーセントを集計。55位まで。

「優樹」：優樹氏のサイトで独断と偏見ランキング。企業と外国館に分かれていたのを得点で合体。20位まで。「サイ」：ランキング・サイト。投票者ひとケタは外す。5点法評価。84位まで。

《気になったこと②》

フィリピン館の外壁にはこんなポエム。「キッツキが答える深く尊敬している君よ／それは無理というものさ君には君の宿る木があり／私には家に残した伴侶がいる。」昔の大阪万博に比べ、チープな感じの外見は多い。循環型だからしかたないか。でも、このように詩を掲げるといっちょとしたアイデアに工夫を感じる。

《24位》イギリス館 51点

GARDENING

イングリッッシュ・ガーデン

庭園。エコロジーの極。それだけ。で、面白いのかというと、ウーン。悩んでしまう。家族をイメージしたモニュメント。庭の中に忽然と。で、家族のことを考えたかという、ウーン。人間の動きを追尾する鮫も、子供が楽しそうにやっていたのでこちらは遠慮。ゲーム感覚でしかない。ついてけない。最後、家庭の郵便受けのようなものが並んでいて、みんなが覗き込んでいる。何事か、と思っただが、ただイギリスの古き良き時代の田園風景が浮かんでいるだけ。エコロジーを展示する難しさを実感。

《他のランクとの比較②》

21	長久手愛知県館	13	びあ	桃太	4	よか	優樹	サイ
22	ワンダーサーカス	7	(4)	71	17	14	46	
23	オーストラリア館	11	-	71	-	-	62	
24	イギリス館	22	-	24	44	-	25	
25	エジプト館	-	-	71	-	16	51	
26	夢みる山	38	-	-	54	7	84	
27	大地の塔	10	-	-	51	8	83	
28	中央アジア共同館	-	-	86	-	-	57	
29	フランス館	14	-	-	11	18	51	
30	ブルガリア館	24	-	82	52	-	80	
次点	中部千年共生村	-	-	-	-	20	69	

不 サツキとメイの家 2 - 4 - 3

不 トヨタグループ館 4 - 33 39 1 5

不 ドイツ館 16 (8) 9 47 11 28

B 北欧共同館 18 - 65 - 29

不 国際赤十字赤新月館 - 6 1 8 - 19

B サウジアラビア館 28 9 24 37 - 48

不 観ていないもの。Bは観たがランキングに入れるほどのことは

なかったところ。32位以下の苦しいランク…32アンデス共同、33ルー

マニア、34ベルギー、35サウジアラビア、36北欧共同、37フィリピン、

38ロボットステーション、39アフリカ共同、40ニュージーランド

ドといったところか。絶対入れないのは「こいの池ナイトイベント」

…スノーモンキーといわれてもなにやらさっぱり。中国・国連…やる

気感せず評価ゼロ。他の凡百の外国館はほとんど印象にない。以

下、ネパール、タイ、モンゴル、ラオス、インド、キューバ、アイ

ランド、チェコ、南アフリカ、南太平洋共同、イエメン、インド

ネシア……。

《衣食住》

ジーパン、Tシャツ、日本の夏。何回か利用したのは「アサヒバ
ノラマレストラン」。こいの池などを風景一望。快感。うまかった
もの？ 特になし。食道楽の趣味はなし。そしてホテル。合宿所も
夏休み中を探すのはだいぶ困難だったよう。閉幕近くはまさにホテ
ル不足。片端から電話をしては断られ、やむなくサウナ泊も。

《25位》エジプト館 45点

DISPLAY

レプリカのツタンカーメン像

グローバル・トラムで回遊中に見て、初めて入るパピリオンにしたのがここ。アフリカに興味があった？ ピラミッドを模したような外見がなかなか面白そうだったから？ いやいや、誰一人並んでいなかったからである。他と比べて目立って人がいなかったのがアフリカを中心にしたグローバル・コモン5であった。

中は、まばゆいまでに輝くツタンカーメンの黄金のマスク。それに棺の複製、入っているミイラ。もちろんすべて複製、レプリカ。後で見ることになる、たとえば「本物」「ここで見られない」「二度と日本には来ない（かもしれない）」ふれこみのものには勝てない。マンモスやイタリア館のサテュロスの迫力は通常以上に増幅されるであろう。エジプトはそれだけでしかなかった。また、各種美術品も、全体的に暗い照明にしているため、すごくありがたげに見える。黄金マスクの黄金度も、中の暗さに比して輝いていたのだろう。

ただ、個性的な外観や、あとでいろいろな外国館を見た目には、最初であったことは除外しても、なかなか面白い展示であったと思える。のちにもう一度入ってみようとしたこともあるが、今度は十分分の単位であろうが並ばなければならなかった。

《スタンブラリー——少年心を刺激された》

万国博の一回性。いま、ここでしか、味わえない体験できないも

の、として人気に拍車がかかった。各レストランでも工夫が凝らされてきたようだが、各種料理といっても、すでにいろいろと我が国には入っている。いわば飽和状態であるし、僕はわりとその点では保守的であり、新しい料理に挑戦するより少しでも話題のパピリオンへと心が向かっていた。

そんな中、途中で目覚め、昔の少年心を刺激され、慌てて集め始めたのが「スタンブラリー」であった。各館にはそれぞれ工夫と特徴豊かな各国・各館の記念スタンプが用意されている。中でもアフリカ共同館は30近くの国が、各四畳半ほどのスペースに並んでいた。全体はニセ・ゾマホンの「アフリカ物産展」と揶揄されるような出来映えではあった。しかし多くのスタンプが集まるのは楽しかった。他、大体の館には出口に置かれていて、コレクターの楽しみを味わった。ワールドスタンプというパスポート大の手帖も販売されていた。ようだが、僕は公式ハンディガイドの該当ページに押ししていた。

半分以上のページにスタンプが押されていくのはなかなか快感。少年時代の切手やら映画チラシの収集癖を思い出した。中でもいちばん良かったのは大判で蝶の舞う韓国館か。

ランキングに選んだ館で唯一、押せなかったのがこのエジプト館。他のアフリカは腐るほど集めることができたのに。エジプトは目覚めたときには行列が並んでいたの、あとでスタンプだけ出口方面から入って押してもらおうとしたが、「ダメよ」と黒人さんに言われてすくんでしまった。僕ももちろん事情を話せばよかったんだろうけど、そういうときには年齢の壁ってやつも実感してしまう。

床面ディスプレイ「めざめの方舟」

ベスト30を選ぶもくろみでいると、これも次のも入ってくる。見終わった感想は「なんじゃこりゃ」であった。苦労したわりにはワケわからん、というヤツ。観る前は「押井守、惜しい」程度の駄洒落でお茶を濁せるレベルなのかと危ぶんではいた。ところが、濁りは広がり、真っ黒になった。それを遙かに超える不可解さで観る者を包んでくれやがった。

世界最大級の床面積（約600平方m）などを駆使する体感型映像空間。シアターは天球型、床には96台のプラズマディスプレイが配され、その周りを巨大擬人像「六将」が囲む。そして壁にも映像が投影され、天井には世界初のタマゴ型スクリーンが設置され、映像が現れる。2か月ごとにテーマが変わるのにあわせ、床面ディスプレイの周囲を囲む139体の擬人像の頭部も魚、鳥、犬（僕のとく）へと変化。クライマックスでは、地球環境回復への願いを込めた自然と人間をつなぐ精霊「汎」^{ぼん}が現れるなど、幻想的な演出。ただし、ストーリーは無く、ただイメージ映像の連発。見終わったあとには、客席に大きな「？」が漂っていた。シアター天井中央にぶら下がっている精霊の人形は、動かないのが正解なのか？ 故障なのか？ 一見してメカニカルな造りで今にも動き出しそうな雰囲気なのが。周囲にあるオブジェは何のために立っているのかも疑問。大自然の光景や動植物の数百に及ぶシーンが万博全期間中の毎日毎回、異なる組み合わせのプログラムで登場するのも特徴で、万博史上初の試み

だそうだ。もちろんリピーターは新しいものを見られて嬉しいのだろうが、一回限りの人には、日替わりネタなんて、自信のなさの裏打ちとしか思えない。パンフレットにある「見どころ」を検証してみよう。①地面が映像になる。迫力の映像体験。②スクリーンを飛び出したアニメキャラクターたち。↓デカイフィギュアが、ただ置いてあったり吊り下げであるだけ。③天地がひっくり返った空間で味わう非日常の世界。しかもパンフレットの最後にこうある。「ストーリーは自分でつくる」。どひゃーん。これら映像群をDNAレベルの記憶に働きかけ「ストーリーは自分で作ってください」とのことだ。映像は10分間。世界初の技術か知らないが、壁や天井の映像は本当に見づらい。ここはシアターにもかわからず立ち見。座るとスタッフに注意される。「立って見てください」と。隣のご夫婦につられ、僕も疲れきって座ろうとしたところ、注意され立たされた。座ったら寝てしまうからだろう。ここは「めざめの方舟」ならぬ「眠りの方舟」。らせん状の客席でなく、フロア席なら違ったか。いやいや。

音響の重低音が迫力タップリだったことと、同じ建物のシャチハタマークタウンのスタンプ体験を入れてなんとかランクイン。

ここは、日付入りやオリジナルのスタンプも作れて、好評であった。残念ながら、僕がようやく訪れたのは閉幕に近いころであり、どこもかしこも長蛇の列の超々満員。すいてるころであればスムーズにできたはずのスタンプ作成も横目で眺めるのみ。日付入りや各種のユニークなスタンプをいくつか押して帰ってきた。

《27位》大地の塔 38点

V I E W

世界最大の万華鏡

EXPO70、太陽の塔。EXPO2005、大地の塔。ホントかよ。会場のランドマーク的存在。元チェッカーズの藤井フミヤがプロデューサー。地上47mの塔の内部は、ギネスにも認定された世界最大の万華鏡。刻々と変化しつづける光の表情を楽しむことができ。塔の巨大な壁面からは水が流れ落ち、気候や時刻によって多様な表情を見せ、潤いと憩いを与えてくれる。周囲では「光」「風」「水」をエッセンスとした自然のパフォーマンスが繰り広げられ、塔の外周には市民が作った切り絵灯籠が彩りを添えている。

しかし苦勞して入った内部は万華鏡。それだけ。ただ、それだけ。朝一番の「当日予約」で午後5時台をゲット。夕方、曇り空、外光はない。中の照明だけだからつまらないのか。いや、一般的にも評判はよろしくない。上を見続けていると首が疲れる。人は上ばかりを見ている動物ではない。江戸川乱歩の『鏡地獄』を思い出す。斜め横に上向きの鏡があったが、それを見ればよいのだ。デカくたって万華鏡。1分も見りゃあきる。失望。

《入館待ち時間―感動と比例するか?》

●並んで入場したもの(丸数字はランク順)

- 1 180分 日立グループ館⑤
- 2 120分 三井・東芝館④ 長久手日本館⑦
- 4 90分 三菱未来館⑥

5 80分 ガスパビリオン⑬ JR東海⑱ ワンダー電力⑳

8 60分 長久手愛知県館㉑ 瀬戸愛知県館㉒

10 40分 スイス館⑯ イタリア館⑩ カナダ館⑪

他の館はいずれも30分以内。もちろんこれは日時にもよるため、参考程度であろう。日立以外は表示よりも早く入れた。

●その他の入場方法

整理券……グローバルマンモス⑭ 瀬戸日本館⑧ 夢みる山㉓

当日予約……韓国館③ 大地の塔㉔

※ただし時間の指定はできないタイプ。

●混雑のため断念……トヨタ館。一部で「豊田博」とも呼ばれるこの万博。朝の開場時、急いで整理券をとろうと走るのが「トヨタ・ダッシュ」と名付けられただけに、観られず残念。しかし日立ほど見た人の評価がすべて高いワケではない。「サツキとメイ」は外見のみ。そのまま何年かは残されるらしいので、機会があれば。ドイツ館と赤十字赤新月館は体験できる人数が少ないせいか、いつも180分以上の待ちで断念。こちらも賛否両論あったが。

なお、サツキとメイについては面白い話がある。もともと、スタジオジブリの鈴木プロデューサーに万博側が依頼したのは、『風の谷のナウシカ』の舞台公演だったという。規模やら何やらの面で頓挫したが、実現していたらそれこそ必見のステージとなっていたであろう。万博全体のテーマとも関わるし。断念したためにアニメの風景を実写で再現するのみに落ち着いたそうである。当初ロソンの予約からハガキのみに変更した顛末を書いたサイトより。

巨大涅槃像

カザフスタン、キルギス、タジキスタン、ウズベキスタン。アジアの真ん中で、東西の交流を支えたシルクロードの通り道である中央アジア各国。4か国とも1991年のソ連崩壊時に独立した国。ランクインした理由は唯一、13m超（↑）の涅槃ねはん像による。アジナ・テベ遺跡から発掘されたもののレプリカ。6世紀頃に作られた物と言われている、バーミヤンの石仏が破壊されてしまった現在では、唯一の大型仏像となっているそう。斜めに横たわっている。たぶん縦や横では入りきらなかったのだろう。ちょっと窮屈そう。それくらい大きい。なんのことはない外国館。しかも共同館では唯一、息をのむほどの迫力にタジタジ。

《交通——モリゾーゴンドラの謎》

話題のリニモには乗ってみた。初めて実用化されたりニアモーターカー。名古屋からのエキスポシャトルに隣接しているため、利用はしやすい。万博八草駅から最寄りの万博会場駅まで。たった3分。それでも大変な混雑ぶり。ひどいときには乗るために4分以上待った。で、乗ったら3分。朝の通勤電車並みの混雑だから、傾斜した体を支えるのがやっと。もちろん景色を味わう余裕などない。途中、一駅「陶磁資料館前」にも止まる。だから、リニアが本来持っているスピードを体感する間もない。万博閉園後も残るそうだが、閑古鳥が鳴かないことを心から祈りたい。無理かなあ。他にはゴンドラ。

2種類あって、長久手・瀬戸の両会場を結ぶモリゾーゴンドラは無料。長久手会場内を南北に結ぶキッコロゴンドラは一般600円の有料。モリゾーには何回か乗った。途中、高さもあり、なかなかスリリングなライド体験。一部生徒の評判も高かった。住民のプライバシー保護のため、途中、3分ほど籠内かごうちの窓が真っ白になるところあり。仕組みはよく分からなかった。また、最初の下見のときにやはりこれも500円払って「グローバル・トラム」に乗ってみた。会場内周遊路グローバル・ループを回遊する、遊園地のチンチン電車程度の三両編成。優先ルートもあって、先頭には人間が立って工事現場のライトのような細長い棒を持って左右に振り、歩行者の注意を喚起する。つまり、人間が歩いている程度のスピードしか出ないしかけ。それでも、最初だったのでアナウンスによる説明も役立つ。ここが空いているとか、いろいろ分かった。他、エコロジィというより戦前回帰(?)の自転車タクシー、二世紀最先端の燃料電池バスやIMTSは乗っていない。7分の5を体感した計算になる。思えば、大阪万博のときには「動く歩道」が話題になっていたっけ。十年もたたないうちに当たり前になったけど。

また、マスコットキャラであるモリゾーとキッコロも、イラストシャツやノートなどたくさん土産に購入した。最初は「毛の生えたムーミン」とか「小型のトトロ」といわれてなじめなかった。ところが、万博会場のいたるところにイラストや着ぐるみ系で現れ、自分の中でも万博全体への好意とともに正比例してシンボライズされていった。閉幕後もしばらくは待受画面に採用するほど、いとおしく感じる存在になってしまった。慣れとはなんともし恐ろしい。

《29位》フランス館 33点

DISPLAY

行ったことはあるが嫌いな国

ドイツと共同の建物。巨大スクリーンも素通り。時間が合わなかった。自慢の巨大画像は見えない。環境サミットをテーマに「汚すのは誰だ？」と警告メッセージを出すらしいが、核実験をつい先日まで行っていただけに、怒りすら覚える。ルイ・ヴィトン・アイランドは、天然資源の持続可能な活用を象徴する「海の塩」で作られ、ダッソー・システムズの斬新で巨大オブジェは、無数の半透明なポリプロピレンでできた触角で覆われている。他は特筆すべきことなし。つまらん。

《遊園地との比較》

気に入ったから何回も足を運んだのである。だから時間を使ってこのような文章を書いてもいるのである。いちばん感じたのは、万国「博覧会」の意味である。環境博、映像博などと呼ばれていた。そういう面も確かにあったろう。しかし、人気を集めていたのは、やはりライド系のいくつかであった。

遊園地など各種アミューズメントパークと比較してみよう。僕も、代表的な東京ディズニーランド、富士急ハイランドなどには行ったことがある（USJはまだである）。迫力ではFUJIYAMA、面白さではディズニーランドの各種マウンテン系のほうが上だろう。日立と電力館ぐらいいしか体験してないので、簡単に比較はできないけど。入館方法では、ディズニーランドですでに定着した「ファ

スト・チケット」の応用が各種予約として結実していたのだろう。なるべく効率的に回れるよう工夫の跡は見えた。

また、観客に親子連れ・家族連れが目立った。特にベビーカーが、とりわけ環境に配慮し、段差などをなくしたバリアフリー空間に溶け込んでいた。もっと若い人が来るところだと思っていたのに。生徒との合宿中など、予想以上に同じスタイルの若者がいないものだと感じた。客のことでいえば、次回開催の中国からの修学旅行。なんと、背中におそろいの「修学旅行（中国）」と書いたポロシャツ姿。習慣だとしたら、なんとも面白い。また、中国館には2010年、上海万博。テーマ「BETTER LIFE、BETTER CITY」が掲げられていた。「環境」の理念は継承されるという。5年後、ぜひまた行ってみたい。しかし、それもいまの靖国問題などが解決し、もっと友好的になってからという気がする。今回、中国のやる気のなさ、元気のなさは目立った。GW中に中国で反日デモが起きた影響をひしひしと感じた。チャイナ・ドレスのコンパニオンも、心なしか顔が沈んでいた。

ここでも中国古来の箏曲の演奏など、パフォーマンスはあったようである。時間は合わず聴くことはできなかった。対面していたら、たぶん評価は激変していたかもしれない。まあ万博とはいえ娯楽優先なのだから、政治色や暴力の匂いがキナ臭いというのは、それだけでマイナスであろう。今回の中国館関係者にはそれこそ関係ないことかもしれないけれど。香港大好きな僕としては、すぐ隣の韓国館の充実ぶりや威勢のよさと比べ残念至極。

スメル・パビリオン(?)

おぼろげな記憶ながら、35年前の万博のときにブルガリア館に入った記憶がある。パビリオンの前で記念撮影した気もする。おぼろげな記憶。35年も前なのだし。そして今回も、おぼろげな記憶しかこの館にはない。印象的なのはブルガリアといえば、「琴欧州！」ではなく、ヨーグルト。それだけ。ま、それも乳製品の販売所のほうが他の展示物よりも目立っているからなのだが。匂いとノスタルジーの関係。考えてみる価値があるかも。

《大阪万博との比較》

大阪万博については本当に記憶が薄い。1970年。僕は9歳の小学四年生。場内の記憶はほとんど欠落していて、辛うじて太陽の塔のあった「おまつり広場」で写真を撮ったこと。右のブルガリア館前であろう場所でも写真を撮った。あとは行く直前に市内間で引越しをしたことや、行く前日に自転車坂を激走して激転び。外科に行って「万博行っていい？」と訊いたこと。だから、写真は左膝に包帯を巻いているのだ。万博にまつわる初体験といえば、当時住んでいた山梨県富士吉田市から「初めて」新幹線に乗ったこと。そして新大阪に着くと大阪の熱気がプシューッと入り込んで来たこと。止まった宿のおばちゃん笑顔でおかわりしてくれたこと。寝る直前に旅先の父がやけにリラックスしていたこと。そういう細かい雑事ばかりである。もちろん今よりずっとバカな少年ではあったのだ

けど、会場の記憶はホント乏しい。中ではテレビゲームのハシリのよな「AかBか選択するとまた枝分かれ」というようなコンピュータをやったことぐらいだ。今回との大きな差は、とにかくパビリオンの形状か。大阪ではいろんな形状の建築物があった。ところが初めて愛知万博へ行ったとき、広がると思われる景色の、あまりの緑の多さに失望。建物もほとんど四角だけだ。北ゲートから入った風景は母校・中大に似ている。環境保全がテーマなのだから仕方ないが、もっと未来都市的な感覚があると思いでいたのだ。

大阪は違った。一望、感心したものだ。僕の同世代には、輝ける二一世紀のイメージを形作られた大イベントであった。それもあいにく、直後のオイルショックで瓦解するのだが、高度成長というものを当時子供心にも実感していた。ただ、その後の沖繩海洋博(75)、つくば万博(85)、大阪花博(90)には行ってない。しかし、最近では、同世代のクリエイターがさまざま万博関係にリンクしている。いちばんの刺激は浦沢直樹の『20世紀少年』。スピリッツ連載中の、サスペンスフルな新世紀へのドラマ。懐古するシーンのノスタルジーも見応え十分。加えて、『クレヨンしんちゃん』の劇場版『嵐を呼ぶ! モーレツオトナ帝国の逆襲』も大阪万博が幸せな子供時代の象徴として描かれ、僕の中での万博機運隆盛に一役買った。しかし、つくづく思うのは、これだけ出かける気持ちにハマってしまったのであれば、なんで4回行けばモトがとれるパスポートを買っておかなかったかってこと。かえすがえすも、今回の万博のテーマにも通じることが口をついて出る。MOTTAINAI!

ミズノバ ヽアクア・マジック

長久手愛知県館を出ると、入館を促される。ここは中部地方の9県が共同出展。この「中部」とは、1966年に施行された「中部圏開発整備法」によって定義された中部圏のことで、本来中部地方の新潟と山梨は入らず、近畿のはずの三重と滋賀が加わる。

さて、記憶すべきはミズノバ体験のみ。これは高さ3mから球体状に放水される水のドームで、その水でできたスクリーンに映像が映し出されるもの。でも、ああ、頭上の水に色が映っているね程度。あとはもう、ただのパネルによるブース展示しかない。サイクロパスというロボットもあったようだが覚えていない。

《環境、エコロジー》

本当は万博によって名古屋東部丘陵を大開発したかった愛知県。

候補地が海上の森に決まる前から行われていた、名古屋地元有力者による土地購入。万博開催はその利権のために行われるのではないかと言われた時期もあった。しかし、建前で言い始めたはずのテーマ「自然」が建前では済まず、自然がテーマの万博開催と東部丘陵開発が自己矛盾に陥ってしまう。そして愛知県は開発をあきらめ、県営公園だった愛知青少年公園での万博開催に収まる。

瀬戸会場の最も奥にある瀬戸愛知県館。この建物は瀬戸会場の端にあるとともに、「海上の森」の端に位置する。愛知県は当初、この海上の森を「万博会場とする計画を立てていた。森を開発して万博

会場を建設し、万博終了後はそこに住宅や科学技術施設を作るつもりであった。しかし、環境をテーマに掲げた万博で森を破壊するのか、絶滅危惧種であるオオタカの巣がある森を破壊するのか……。

国はしぶしぶ計画を変更。結局この森の近くにあった県営の公園を改造して万博を開催することになった。公園で万博をやって終わったら公園に戻すのだ（年が明けて06年、モリコロパークに決まった）。一種の皮肉がこの万博を象徴している。

70年万博との違いは、まったくもってその地味さ加減である。空撮された長久手会場の全景を新聞などで見たが、ほとんど地味な白黒もしくは茶色の建物である。赤い観覧車の建物だけが異様に目立つ始末であった。それもそのはず、いたるところにエコロジーの旗は掲げられていた。

「このトイレはまた別の場所にリユースされます」「この木材は再利用されます」……。

環境、エコロジー。意味のあることは十分にわかっているけれど、なかなか一歩足を前に踏み出せない。そんな中、日本庭園を覗いたぐらいだが、周辺の水辺散策もふくめ、自然そのものが展示物となっているのは面白い試みではなかったか。

いままで僕は、そんな視点で自然の風物を眺めたことはなかった。この年齢になるまで気づかなかったのは、あるいは愚かなことなのかもしれない。今後は、春の桜舞い散る姿や白一色に染まった雪景色を愛でるだけでなく、環境保全の一端を背負う気持ちを抱き続けたいものである。

■退場ゲート

EXIT

本当の意義は帰ってから分かった

公式ホームページには「見る・食べる・遊ぶ・買う・学ぶ」と見どころがあげられていた。僕にとっては真ん中の三つはあまり関係がなかった。また、あるサイトでは評価の対象を「面白度・勉強度・意外性・感動度・雰囲気」としていた。同様に、「メッセージ性・すごい・珍しい・美しい・楽しい」というのもあった。こういう視点は、芝居も同じだ。演劇に非常に役立つのだ。

少しでも記録と記憶にとどめて、決して安くなかった入場料や交通費のもとをとろうとする僕は、こうしてまとめてみて思った。なるほど、これは、演劇部というより、日々の本分である授業にも応用できるものであったのだと。

「難しいことをやさしく、

やさしいことを深く、

深いことを面白く」

このスローガンは、井上ひさし氏と氏の劇団「こまつ座」のものである。これを聞いたとき僕は教師として、これだ、と膝を打ったものである。

愛・地球博で、何回かこの言葉がよぎった。今回の最大の収穫は、「演出」というよりも、「教育」や「研鑽」というものだと考え当たったしだいである。

地球環境、IT、自然、未来、ロボット、映像、いろんなものが雑然と浮かぶ。そして、その雑然とした混沌はいま我々が生きてい

る状況と重なる。国をあげてのどっかい「文化祭」をじゅうぶんに満喫することができた。

合宿などのコーディネートには近畿日本ツーリストの稲田幹人さんにお世話になった。また、合宿では演劇部員のみんなや同じ顧問の北原武道先生のご協力をいただいた。ありがとうございました。以下、同様に特に世話になったガイドブック、サイトの名をあげて謝辞としたい。

《書籍・ムック等》すべて2005年刊。

『愛・地球博公式ハンディブック』（3月・びあ株式会社）

『愛知万博へ行こう！』（4月・昭文社）

『愛・地球博公式ハンディブック』（5月・びあ株式会社）

『愛知万博びあ』（5月・びあ株式会社）

『愛・地球博完全攻略ガイド&マップ』（5月・山と溪谷社）

『「愛・地球博」&「デ・ラ・ファンタジア」感動体験BOOK』（7月・講談社）

『賢く行く愛知万博』（7月・びあ株式会社）

《サイト等》

2005日本国際博覧会公式ホームページ

「愛・地球博」EXPO2005攻略法（桃太郎）

トッピーの愛・地球博にくびったけ（トッピー）

Summary

Physics as a Scientific Thought (Kagakusisou to siteno Buturigaku), by Hideo Takagi, was published in 1993 ; but few people know it because he published only a few copies.

The author explains about development of physical theories from the Ptolemaic system to the Relativity, and also about the history of how humans realize the laws of nature.

His explanations are based on dialectical materialism. He criticizes irrational principles of scientific ideas which are spread in the world today.

I also point out, following the idea of the author, that scientific ideas which the author criticizes as irrational principles are shown in textbooks of Japanese language used in Japanese high schools, and I criticize the way of Japanese school education in which the truth is thought little of and irrationalism is allowed.

(d) 科学的、論理的な見方や考え方を養い、視野を広げるのに役立つこと。

(e) 人間、社会、自然などに広く目を向け、考えを深めるのに役立つこと。

と書かれている（「国語表現Ⅰ」、「国語表現Ⅱ」及び「現代文」の教材もこれに準じるよう指示されている）。

社会の現状を反映して、わが国で非合理主義がもてはやされることは、上部構造論（史的唯物論による）からみれば不思議なことではない。したがって、非合理主義的な評論文が教科書教材として持ち込まれることもあり得る。前掲の学習指導要領に照らせば不合理なことであるが、このような不合理に対しては文部科学省による「検定」は役をなさない（神話を教材とした「歴史」教科書が検定を通るのと同様）。このこともまた上部構造論が説明してくれる。

しかし、「未来の国民」の育成に責任を負う教師は、これを当然視してはすまされない。非合理主義を教育された国民が幸福に暮らせる訳はない。それは、わが国の歴史の教訓である。「個人の尊厳を重んじ、**真理**と平和を希求する人間の育成」（教育基本法前文）が教師の任務なのである。

本稿を書き終えたところ、『国語教科書の思想』（文献6）が上梓された。著者・石原氏は小・中学校の国語教科書を分析し、わが国の国語教育は、道徳（支配層に都合のよい）教育に傾いていること、「批評」という高度な精神活動（科学的精神ともいえるのではないだろうか／北原）を導入する必要があること、を主張している。「批評」ではなく、道徳（おしつけられた正解）を要求する日本の読解力教育のスタンダードは諸外国のグローバル・スタンダードとは著しく異なっており、ここに国際的に見た日本の「読解力低下問題」の原因があると、著者は分析している。「受験国語」の研究者であり、長年、高等学校国語教科書の編集委員を務めているという著者は、「天に唾する」思いでこの本を書いたと述べている。

参考文献

- 1 高木秀男『科学思想としての物理学』（しんふくい出版・福井市文京2-6-35 1993年）
- 2 菅野礼司『物理学の論理と方法（上）（下）』（大月書店 1983・1984年）
- 3 岩崎充胤・鯉坂真（編）『現代哲学概論』（青木書店 1990年）
- 4 高等学校国語科用文部科学省検定済教科書『現代文2』（東京書籍 平成17年）
- 5 文部科学省検定済教科書高等学校国語科用『現代文2』（大修館書店 平成17年）
- 6 石原千秋『国語教科書の思想』（筑摩書房 2005年）

より正確に計算する作業に取り組み（本書）、ケプラーの3法則（地動説）に到達した。占星術士であった（本書）ケプラーが行ったことは、物質（自然）への働きかけ（惑星の観測と軌道計算）であり、その結果、人間個人の運命を予測する法則は発見しなかったが、惑星の位置を正確に予測する法則を発見したのである。このことによって、ケプラーは科学者と呼ばれているのである。他の占星術士は、科学者とは呼ばれていない。

—以上みてきたように、勝手に「科学」と「非科学」を作り出し、科学に「？」をつけるのが、科学史家・科学哲学者・村上陽一郎氏の「科学論」なのである。

(9) 反科学主義へのいざない！

(8)で批判した村上氏の文章は、「自然と人間」というタイトルの評論文の一部である。この評論文全体の大意は次のとおりである（私の理解による）。

—人間は、キリスト教の神の支配や王や貴族による支配を退け、「理性」を人間の支配者にした。同時に「非科学」を退け「科学」を成立させることによって「人間（自身）」を「自然」の支配者にした。これが近代文明の図式であり、この図式をよかれと信じているのが『近代文明のイデオロギー』である。『近代文明のイデオロギー』を乗り越えなければ環境問題は解決できない。—

このように、「自然と人間」なる評論文全体の性格は、人類的課題である環境問題にことよせて反理性主義・反科学主義いいかえれば非合理主義・神秘主義を喧伝しているものと言わなければならない。勿論、非合理主義・神秘主義によって環境問題が解決できようはずもない。

実は、「自然と人間」は高等学校国語教科書に載っている教材である（文献4）。この教科書には「学習のしるべ」として、

筆者が述べる「自然」と「人間」の関係に注意しながら、問題点を整理してみよう。と課題設定されている。村上氏の述べる「自然」と「人間」の関係を押さえたうえで問題点（なぜか、何に関する問題点なのかきちんと示されていないが）を整理しなさい、という課題である。高校生に向けての「反科学主義へのいざない」である。

(10) おわりに／「教師と教科書」考

2006年度使用のために発行されている高等学校国語「現代文」教科書は10社28種ある。このうち、前掲の「自然と人間」を含め、5社6種の教科書に村上氏の科学評論文が掲載されている。科学評論文はたいていの教科書に掲載されており、哲学者・黒崎政男氏の「ゆらぐ科学のリアリティー」（文献5）に至っては、反科学主義の声高さは「自然と人間」の比ではない。

反科学主義・非合理主義的な評論文が高等学校国語教科書に頻繁に登場するのはなぜだろうか？

高等学校学習指導要領『国語』では、「国語総合」に関する教材の項で、

《批判》

「科学的」とは、広辞苑によれば、「事実そのものによって裏づけられ、論理的認識によって媒介されているさま。学問的。」とある。つまり、社会的に規定される概念なのである。ところが、村上氏にとってはケプラーや‘その科学者（以下Sと呼ぶ）’など一人ひとりの科学者の一つひとつの言動が「科学的」なのである。科学者は科学に従事する「人」にすぎない。村上氏が思い描くような全能の「神」ではない。だから、学会や学会誌で議論し、集団的な作業によって「科学」を確立しているのである▶少なくとも自然科学においては、ある命題が真理（絶対的真理などではなく、その時点の人類の自然認識の到達レベルに応じた相対的真理）であるかどうかは物質（自然）が証明する。ごく大雑把に言えば、その命題に従って物質（自然）に働きかけた（勿論、人類が、である）とき、予測（予言）どおりの反応を物質（自然）が示すなら、その命題は真理と認められる。このような真理の体系が科学であり、未だこの体系内に入っていない事柄は科学ではない。科学的認識の発展に伴って、この体系が拡大していくことは間違いないが、現時点でこの体系内に入っていない事柄は科学ではない。村上氏によれば、Sは「天体（の運行）が人間（個人の運命）に影響を与えるということは考えられない」から占星術は科学的でない、と言ったそうであるが、上に述べたように科学的であるかないかの基準は、ある科学者が「考えられる」か「考えられない」かではないのである▶太陽がなければ人間どころか地球上の生命が存在できないことは普通の人の常識である。太陽や月が人間に影響を及ぼさない、と本当にSが言ったのであろうか？実は、ここで村上氏は「天体（惑星の運行）と人間（個人の運命）の関係」（占星術）を「天体（太陽や月）と人間（人類）の関係」にすりかえたのである。海亀は満月の夜いっせいに砂浜に上陸し産卵する。生命が天体の運行に影響を受けている例である。天体の運行による例ではないが、太陽活動の周期（11年）は植物の盛衰したがって昆虫などの盛衰ひいては人間の生活に多かれ少なかれ影響を及ぼしている。このように天体の運行や周期現象が地球上の生命に及ぼす影響はいろいろ知られている。にもかかわらず、「ある人間個人の運命と天体の運行との間に1対1の相関が存在する」という事は、まだ科学における真理の領域に入っていない。科学における真理の領域に入っていない事柄については、「分かっていない」と言うのが科学者の言い方である▶『近代文明のイデオロギー』信奉者Sは、自然（天体现象）が人間を支配することがあってはならず、人間が自然（天体现象！）を支配するのだ、と強弁している、それがSの真意だと村上氏は断定する。なぜここで唐突に「支配」なる概念が出てくるのか理解に苦しむが、「人間が天体现象を支配するのだ」などと強弁しているとすれば、Sはどうもい実在する「科学者」とは思えない。村上氏は、あやしげな「科学者S」を登場させることによって、「人間が自然を支配する」という『近代文明のイデオロギー』なるものが作られたのは「科学」のせいだ、と言いたかったのである▶村上氏のケプラー論を検討してみよう。「近代的な天文学者ということになっている」ケプラーが「占星術を信頼していた」のだから、占星術は科学的でないとは言えない、というのが村上氏の主張である。ケプラーの時代は、占星術や神学とむすびついた天動説から、地動説に、転換する時代である。まだ天動説が定説であった。ケプラーは、惑星（火星）の軌道を

と自然弁証法を語るためには、巻頭部分で唯物論と弁証法の解説をしておくのがよかったです。

(8) 演習／村上陽一郎批判

本書を読み終えて（と言っても、理解できないところは多々あるが）、地方の一隅に相対性理論を理解する（それが容易でないことは物理学を学んだ人なら誰でも知っている）人物がいたことに私は驚いた。本書は、その賢人が渾身の力で放った「理性の一矢」だといえる。

ところで、本書には演習問題は一つもない（実は一箇所だけ、相対論的運動方程式を解説するところで、4次元ベクトル f を定義し、これが相対論的な力であることの証明を「読者におまかせしよう」と書かれている。そして答のかわりに f の第4成分の形が示されている。まるで「最終定理」を発表したフェルマーのような意地悪さである）。

そこで、本書の最後のテーマ“日本の科学哲学”に関する自主的な問題演習として、私は村上陽一郎氏の科学論を具体的に批判してみよう。さらに、つづく(9)、(10)の項で、このような科学論の社会的影響の一断面について考察する。

(8)、(9)、(10)項の文章は、高木秀男氏の一の矢に続く、私の二の矢である。この矢（いささか兵六玉であろうが）を添えて、本書の書評としたい。

高名な科学史家・科学哲学者、村上陽一郎氏の文章につきのようなものがある。

かつては占星術と天文学とは、相互に浸透し合い、明確に区別することが難しかった。それは西欧でも例外ではない。例えば、ケプラーは、現在では近代的な天文学者ということになっているが、実情は全く違う。彼はホロスコープをかいて生計を立てていたし、それは単に身過ぎ世過ぎのために意に染まぬことをしていたのではなく、ケプラーがはっきりと占星術を信じていたからであった。彼は自分自身にもホロスコープをかいていて、自分の運命がいかに悪い星の下にあるかを嘆いてさえいる。今日の文明社会に生きる我々は、占星術を信じることを、たてまえ上許されないことになっている。その理由は、科学的でないから、というのが公式的な言い方になろうが、私の見るところでは、それはたてまえにすぎない。科学的立場から見れば、天体が人間に影響を与えるということは考えられない、などと占星術を批判する科学者が言うことがあるが、もし本気でその科学者がそう言っているのだとすれば、それはとてつもなく非科学的ということになってしまうだろう。なぜなら、太陽や月という天体から地球上の我々人間がどれだけ多くの影響を受けているか、科学的に見て、ほとんど推算することさえ困難なほどであるからである。こうした発言の真意は、実は、「人間」が「自然」を支配するのであって、「自然」（この場合は天体現象）が「人間」を支配するなどということは、近代文明のイデオロギーから言えば、決してあってはならないのだ、ということにあるとしか考えられない。

類の区別があることが説明されている。出だしから興味がそそられる。

本書を物理学教科書らしくするためには、著者がやむなく割愛したという剛体力学、線形現象、波動など、を含めまだまだ多くの分野の法則を解説することが必要であろう。

(6) 物理学史読本としての本書

本書全体が物理学史である。物理学史の「物理学」をなおざりにしないで、それはそれとしてしっかり解説したものが本書だといえる。

ニュートン力学誕生までを解説した『プリンキピア』への道は労作である。初等物理の範囲なので誰でも読解することができる。この科学革命の時期、鎖国日本で地動説がどんな状況にあったのかとか、伝わっていたニュートン力学をすでにマスターしていた日本人がいたことなどが紹介されており、日本史の話題としても興味深い。

また、アインシュタインの相対性原理が物理学上のどんな矛盾を解決したのか、も分かりやすく読み取ることができる。

物理学史の断片（運動量と運動エネルギーの概念が分化していく過程など）が本文中のあちこちにちりばめられていて参考になる。が、物理学教科書という位置付けも大切にして、物理学理論の解説でない部分は、1行の字数を3文字ぐらい減らして右寄せにする、また鎖国日本の状況などまとまった話題はコラムの中に入れる、などして、物理学史上の話題によって物理学理論の解説の流れが途切れないよう工夫するとよかったのではないだろうか。

物理学史全体を鳥瞰できる年表（各分野を欄別・平行に記載して、例えば熱力学がこの段階のとき電磁気学がこういう状態だったということが分かるような、また各分野でぶつかっていた困難が相対性理論によって解決される過程が分かるような）があるとよかった。

(7) 科学思想史・哲学読本としての本書

最終章、最終節の「7.2 科学論へのいざない」で、まとめてこのテーマが扱われている（ちなみに、菅野にはこれに相当する項目はない）。アリストテレス以来が解説されているが、大部分は現代の科学思想（哲学と言ってもよい）に関する解説である。ポパーの反証主義、クーンのパラダイム論などが批判も含めて解説されている。かれらの影響も受け、科学の客観性を否定する（本書）日本の科学哲学の状況も、簡潔にはあるが、批判的に解説されている。その論者のうちの一人が、名指しはされていないが、村上陽一郎氏であることは容易に判断できる。

このように、科学思想を一節にまとめて論じたのは分かりやすいが、本書を「科学思想としての物理学」と名付けたからには、エネルギーの転換、粒子と波動の二重性、「物質」の消滅、物質と時間、物質と空間など、唯物論や弁証法を理解する上で重要なテーマについて、本文中で臨場感を持って自然弁証法が展開されていてもよかったのではないだろうか。本文中で、もっ

現代の自然科学では物質とその運動（変化、発展）を、物質そのものが持つ法則性（人間の意識や神とは関係なく）として説明する。つまり、物質（自然）を世界の根源的なものとする唯物論の立場である。ガリレイの宗教裁判はよく知られているが、本書ではラプラスの『天体力学』以降「神の出演がなくなった」（唯物論が確立された）と述べられている。しかし、直接的経験（感覚）を物理学理論の中心にすべしだとしたマッハの考え方などもあり、今でも物理学者のなかには唯物論的でない流れもある。

弁証法……世界のすべての事物が互いに連関しあいながらたえず運動し、変化し、発展しているとみる見方（本書）。連関や発展に関して「対立物の相互浸透」「量から質への転化およびその逆の転化」「否定の否定」の3法則をはじめいくつかの法則がある、とされている。

形而上学……ものを他から孤立し、固定して（変化しないものとして）見る見方。

物質のあり方を本質に向かってアプローチしていく物理学・化学の分野で唯物論が確立されていったのに対して、物質の複雑な存在・現象に向かってアプローチしていく生物学・地質学の分野で弁証法が確立されていった、と言えるのではないだろうか。それを象徴するのがダーウィンである。創造主なる神の居場所を奪ったダーウィンの「進化論」は、ガリレイの「地動説」と同じく、教会権力の激しい介入とのよぎなくされた闘いの末、認められることになった。古代ギリシャ以来の夢であった永久に変わることのない「原子」にたどりついた化学や、普遍的な法則を求め続けている物理学は、弁証法とは関係ないように思われがちであるが、今日明らかになっているのは、瞬時の寿命で流転する素粒子の存在をはじめ、ビッグバン以来「原子」を含めてあらゆる階層(註)で進化する物質の姿なのである。ヒト（人）も含めて物質（自然）が弁証法的存在であることは自然科学の常識といえる。

(註) 素粒子 → …… → 原子 → 分子 → 結晶（鉱物・蛋白質） → （岩石・細胞） → …… → （地球・生命） → …… → 宇宙、というように物質が層構造をなして存在している。その一つひとつの層を階層という。

なお、「弁証法」という言葉は哲学者によっていろいろな使われ方をしている。ここでは、本書の定義によった。また、同じ使い方ではあるが、菅野は自然科学で弁証法を語る場合、「自然の弁証法」「認識過程の弁証法」「論理の弁証法」と、カテゴリーを分けてこの言葉を使用している。いい方法である。

なお、形而上学的なもの（見方）はどんな場合でも間違っているという事ではない。自然科学の「切り札」とも言える「実験」は、ものを他の影響から切り離し、固定して調べる形而上学的な作業である。

きちんと哲学を勉強したい人のためには、文献3を挙げる。

(5) 物理学教科書としての本書

「力学」「電磁気学」など物理学の普通の教科書は、完成された理論だけを、余計なことは書かずに、解説し、また公式なども実際に使ってみせている。理解を確かめながら進むために、例題などが付いている。これに対して本書は、物理学上の基本概念・基本法則に重点を絞ってこれらを解説する（主として公式の導出まで）にとどめ、これらの概念・法則が獲得された経過、付随する事柄、場合によってはエピソードなどが書かれている。正直に言って、実際に問題を解くところまで物理学を勉強するためには、本書は教科書としてあまり向いていない。本書は併読書として活用するのがよい。概念や法則を深く理解するのに役立つだろう。また、ある程度物理学を勉強した人が本書を読むと、物理学の理論構造を整理することができるだろう。冒頭の「0.2 物理の法則とは」で、物理法則には4つのタイプがあること、等号の意味に3種

り誤解のもとにもなるので著者の望むところではないであろうが、①を理解するのは容易なことではないので、とりあえずそのように読んでみるのも一つの方法であろう。本書には膨大な数の参考文献が挙げられているので、後で知識を補ったり深めたりすればよい。なお、著者も参考文献のひとつに挙げているが、本書と同様の意図・内容・構成をもった文献2（以下、菅野と略）は、本書より完成度が高い。本書は著者がこの分野でのエチュードとして公にしたものである（もしかしたら、新たな著作が出版されているのかも知れない）。

(3) 「3つの顔」の背景

古代ギリシャ以来、哲学者は(i)我々をとりまく世界はどうなっているのか？(ii)そこには、どういう法則性があるのか？(iii)したがって、我々はどうあるべきか？と説いてきたようである。まず、万人が承認できる(i)を提示しなければならない。そこで決まったように持ち出されたのが天地（宇宙）である。宇宙の説明をしなければ哲学者の資格がなかったかのようである。（以上は私の感じているところであり、正論かどうか分からない。）デカルトの頃までは哲学者イコール物理学者（萌芽的な）でもあった。ニュートンの頃以降、物理学は自然科学の一分野として哲学から分化する。哲学者と自然科学者の分業が起こる。しかし、哲学は(i)からスタートしなければならない。よって哲学者は、自然科学者でないにせよ自然科学の到達点を理解していることが必要となる。このような事情からか、哲学者は科学史家と呼ばれることが多い。（以上も私の感じているところであり、正論かどうか分からない。）さて、宇宙論で2回の革命が起こった。1回目はコペルニクスの転回（天動説から地動説へ）とその帰結であるニュートン力学の完成（絶対時間・絶対空間）であり、2回目はアインシュタインの一般相対性理論の登場（絶対時間・絶対空間の否定と時空の一体化）である。本書で後に登場する2人の哲学者のうち、ポパーは2回目の革命を、クーンは1回目の革命を科学的に研究し、それぞれの哲学をつくったとされている（本書）。著者は哲学的には、弁証法的唯物論の立場にあり、ポパーの哲学にもクーンの哲学にも批判的である。そのためもあってかニュートン力学完成の経緯と一般相対性理論登場の経緯に重点を置いて、本書は書かれている。

(4) 唯物論と弁証法

本書は弁証法的唯物論の見地から物理学理論、物理学史、科学史、科学思想史、科学論を著したものである。最終章、最終節の「7.2 科学論へのいざない」の第2項（7.2b）で弁証法的唯物論が解説されている。しかし初心者向けの解説としてはやや荒っぽい。本書は、ある程度の哲学の予備知識をもって読むのがよいと思うので、出過ぎたこととは思うが、今後本書を読む人のために、ごく基本的な事項を簡単に説明しておく。

唯物論………精神に対する物質の根源性を主張する立場。（広辞苑）

観念論………物質に対して観念的なものの根源性を主張する立場。（広辞苑）

書評 高木 秀男 著『科学思想としての物理学』

北原 武 道

(1) はじめに／本書との出会い

本書（文献1）は、今から12年前の1993年9月に出版されているが、世にはあまり知られていない。かく言う私も、最近、ある知人から「こんな本があるんだけど……」と、教えられて、読んだ次第である。著者・高木氏は東北大学、同博士課程（地球物理学）を1970年修了（理学博士）し福井工業大学助教授となった。一般教育の物理学・数学の講義を担当していたが、2年後には、「教授会でのあたりまえの発言」に端を発し解雇にまでエスカレートした「福井工大事件」の原告となった。本書で、ガリレイ裁判について詳しく触れているのは、科学者が権力によって弾圧されるという問題を考えてもらいたかったからである、と記されている。当初、「教養としての物理学」という教科書を執筆していたが、この事件が勃発し、教科書どころではなくなったそうである。全面勝訴の判決を勝ち取った20年に及ぶ闘いの後、タイトルも改めて本書が出版された。「された」というよりは、印刷・製本以外は高木氏が行っているのだから、自ら出版「した」というべきかもしれない。本書の奥付に「注文は直接著者に」と記されている。本書が世にはあまり知られていないのも無理はない。

「大学教養課程の物理学の教科書として出版した」「科学教養書として、理工系の学生だけでなく文科系の学生にも、そして中学・高校の先生方にも読んでいただければ大変有り難い」と、本書のまえがきに述べられている。

(2) 本書の「3つの顔」

本書はつぎの3つの顔をもっている。

① 物理学教科書として

力学、解析力学、熱力学・統計力学、電磁気学、特殊相対性理論・一般相対性理論、量子力学の基本法則の解説

② 物理学史読本として

③ 科学思想史・哲学読本として

そして、これらは綾織になりながら全体が構成されている。本書は①の専門書でもなければ、②、③の専門書でもない。①、②、③の予備知識・基礎知識がある人にとっては、大変有意義な本として読み進むことができるであろう。①の基礎知識のある人は、斬新な思いで②や③を読むことができるであろう。①は字面読みして②や③だけ読み取ろうとするのは、邪道でもあ

の心理的な事柄を取り上げる際の量的なアプローチの限界が考えられる。選手の態度や発言から変化を読み取れることもあり、全く変化がなかったということではないと考えられるからである。今後、質的研究法の手法などを取り入れ、より詳細に個人の変化を捉えていきたい。

要 約

本研究の目的は、サッカー部の夏期合宿での生活や練習、ミーティングを通して自分や他者を見つめなおす機会を与え、チームのモラルの向上や戦術理解を含めた心理的な変容を促進させることであった。「モラル指標」「off the pitchの行動指標」「自己・他者受容指標」「チーム戦術・役割理解の指標」についてのアンケートを実施した。結果、「モラル指標」において、合宿の2ヶ月前と合宿最終日との間に有意差が認められた。他の指標については変化のパターンを示した有意差は認められなかった。

今後合宿を実施する際、集中的グループ体

験の要素を含んだミーティングや個人が課題を発見し解決をしなくてはならない状況を設定したプログラムなどを取り入れる必要があると考えられる。

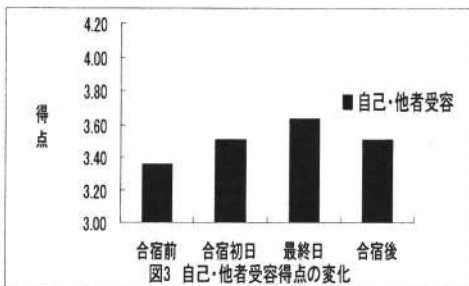
文 献

- 1) 阿江美恵子 1985 チームゲームと集団凝集性—ゲームによる凝集性の変化— 体育の科学, 35, (2), 96.
- 2) 江幡健士 1977 チームに対する“集中的グループ体験”の効果についての心理学的研究 体育学研究, 22, (1), 37-47.
- 3) 中川昭 1994 チームゲームにおけるビデオを使った戦術トレーニング 体育の科学, 44, (7), 550-553.
- 4) 竹村昭・丹羽昭 1967 運動部のモラル研究(1)—モラル調査の作成— 体育学研究, 12, (2), 77-83.
- 5) 土屋裕睦・中込四郎 1996 ソーシャル・サポートの活性化をねらいとしたチームビルディングの試み スポーツ心理学研究, 23, (1), 35-47.

入れるなど、指導者が解決方法を与えすぎないことで問題解決能力が高まると考えられる。

自己・他者受容指標について

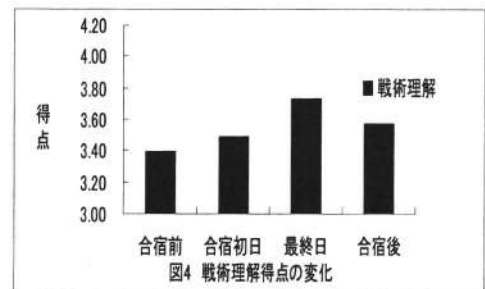
得点の変化のパターンとして、合宿前(M=3.35 SD=0.56)、合宿初日(M=3.51 SD=0.58)、合宿最終日(M=3.64 SD=0.70)、合宿後(M=3.51 SD=0.62)と徐々に得点が増加し、合宿後に得点が減少することが明らかになった。一元配置の分散分析の結果、有意差は認められなかった(図3)。土屋・中込(1996)⁵⁾は、グループディスカッションの中で、「他人の行動を変えようとしなさい」といったルールや、「感じたままの今の気持ちを出し合うこと」といった集中的グループ体験学習の原則も踏襲したところ、モラールや自己開示が促進され、対人関係の質的変容がなされたとしている。本研究においても、意図的に自由に感情を表現したり、他者の意見を無条件に受け入れるといったルールをつけたミーティングなどを取り入れることによって、話しやすい雰囲気や他者の話を聴きやすい雰囲気ができ、自己や他者を受け入れやすくなると考えられる。



チーム戦術・役割理解の指標

得点の変化のパターンとして、合宿前(M=3.39 SD=0.61)、合宿初日(M=3.49 SD=0.64)、合宿最終日(M=3.73 SD=0.78)、

合宿後(M=3.57 SD=0.54)と徐々に得点が増加し、合宿後に得点が減少することが明らかになった。一元配置の分散分析の結果、有意差は認められなかった(図4)。大会での目標を確認し、毎日その日の練習の反省をして次の日の目標をたてて練習をすることで戦術や自分の役割の理解を深めようと試みたが検定結果からは理解度が深まったとはいえない。今回のミーティングではビデオ映像を見ながらの戦術確認などは行われなかった。中川(1994)³⁾は、ビデオは現在ではスポーツの戦術トレーニングにおいてもっとも有用な媒体であると述べており、ビデオを用いた方法を含めたより徹底した指導が必要となろう。



今後の課題

「off the pitchの行動の指標」「自己・他者受容指標」「チーム戦術・役割理解の指標」に向上が示されなかったことを考えると、合宿のプログラムや生活の中で、意図的に自己や他者を受け入れることを狙いとした集中的グループ体験の要素を取り入れたミーティングを取り入れるのも1つの方法であると考えた。また、練習の課題を自分たちで見つけ、解決策を考え実行するといった主体的な活動を多く取り入れる必要があると考えられる。研究上の問題点として、本研究のような個人

を受けた選手はメンバーの前で発表をした。

結果・考察

モラル指標について

得点の変化のパターンとして、合宿前(M=3.49 SD=0.57)、合宿初日(M=3.84 SD=0.51)、合宿最終日(M=4.04 SD=0.50)、合宿後(M=3.70 SD=0.65)と徐々に得点が増加し、合宿後に得点が減少することが明らかになった。一元配置の分散分析を行った結果、グループ間に有意差が認められた($F(3,64)=2.91, p<.05$)。多重比較を行った結果、合宿前に比べて合宿最終日の得点が高いことが示された(図1)。目標達成のためにモラルや自己開示が重要な要素であり、それらを高めるためには、メンバー間のコミュニケーション(自分の考えていることを率直に他のメンバーに伝達することや、他のメンバーの意見を率直に聴けることなど)が重要であるといわれている²⁾⁵⁾。本研究において、メンバーは練習やミーティングを通じて目標を再確認し共通理解し、協力することができた。その過程で日常よりメンバーとのコミュニケーションが密接になり、自分の意見を伝えることや他人の意見を聴くことができるようになりモラルが高まったと考えられる。合宿後にモラル得点が減少した理由として、合宿時に比べてコミュニケーションを図る機会や自己開示する機会が減少したことが考えられる。また、阿江(1985)¹⁾は、チームの凝集性は勝つと増加し、敗れると減少すること、ゲームごとに変動することなどを述べており、本調査対象チームも合宿後の調査の前に大会で負けているため、そのことも結果に影響を及ぼしていると考えられる。

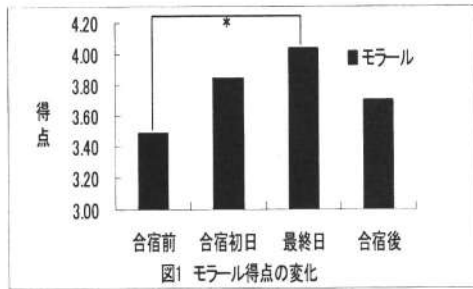


図1 モラル得点の変化

Off the pitchの行動指標について

得点の変化のパターンとして、合宿前(M=3.53 SD=0.63)、合宿初日(M=3.78 SD=0.54)、合宿最終日(M=3.71 SD=0.68)、最終日(M=3.61 SD=0.51)と合宿初日に最も得点が高くなり、徐々に徐々に減少していくことが明らかになった。一元配置の分散分析の結果、有意差は認められなかった(図2)。合宿中の調査はミーティング時に行われており、初日は生活のルールやマナーについての話があった直後のため最も高かったと考えられる。しかし、有意差は確認されていないため本研究においては変化がなかったものと判断した。日本サッカー協会は、指導教本の中で「クリエイティブでたくましい選手の育成」を提示している。サッカーにおいても、日常生活においても自ら考え判断をすることは重要なことである。次の日の練習メニューを選手で話し合わせて決めるといった方法や、自分や他のメンバーの課題を指摘し、解決法を考える時間を与えるような練習方法を取り

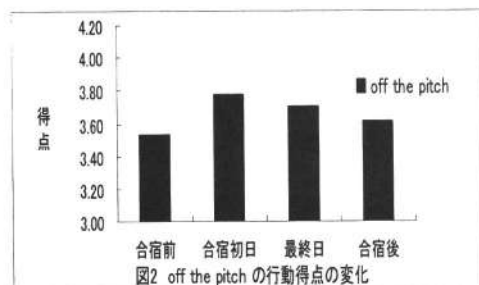


図2 off the pitchの行動得点の変化

ムビルディングプログラムの際にモラルの指標として使用した「私はチームの目標達成のために協力している」「チームの目標達成のために、メンバーは協力していると思う」「チームのメンバーはまとまっていると思う」「私のチームでは、お互いの意見を出し合っていると思う」「私は現在のチームに所属していることを誇りに思う」「私は今のチームの雰囲気が好きである」の6項目を用いた。

off the pitchの行動指標：日本サッカー協会公認の指導者4名に off the pitch で習慣にしてほしい事柄について項目を挙げてもらいその中から、「私は、周りの雰囲気を考えて行動することができる」「私は、自分で考えて行動することができる」「私は、自分で問題や課題を見つけることができる」「私は、チームの誰とでも、親しく接することができる」「私は、チームのメンバーを信頼している」の5項目を用いた。

自己・他者受容指標：電話カウンセリングのカウンセラー養成講座における人間関係基礎講座において実施されている項目を参考に「私は、自分の気持ちや意見を自由に表現できる」「私は、メンバーの気持ちや考え方を理解している」「私は、自分と違った考え方やタイプのメンバーも受け入れられる」「私は、メンバーの話を正しく聴き、理解することができる」「私は、自分という人間を十分に理解している」の5項目を用いた。

チーム戦術・役割理解の指標：自分や味方がチームの戦術や役割をどの程度理解していると感じているかを把握するために、「私は、チームの戦い方を理解している」「チームのメンバーは、チームの戦い方を理解している」「私は試合における、自分の役割を理解している」「チームのメンバーは、自分の役割を

理解していると思う」「チームのメンバーは、私の役割を理解していると思う」「チームのメンバーは、私のプレーの特徴を理解していると思う」の6項目を用いた。

調査方法

平成16年獨協高等学校サッカー部夏合宿の2ヶ月前、合宿初日、合宿最終日、合宿の2ヵ月後にアンケートを実施した。実施に際しては、ミーティング時に監督より配布され、選手はその場で回答し回収された。

合宿の期間と内容

平成16年8月4日～9日に実施された5泊6日の合宿のトレーニングプログラムは表1に示した通りである。

表1 合宿スケジュール

	初日	2日目	3日目	4日目	5日目	最終日
午前		ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ
		アジリティ Tr	アジリティ Tr	アジリティ Tr	フィジカル Tr	試合
		DF Tr	DF Tr	DF Tr		
午後	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	ウォーミングアップ	
	アジリティ Tr	アジリティ Tr	フィジカル Tr	アジリティ Tr	試合	
	シュート Tr	シュート Tr		シュート Tr		
	フィジカル Tr	フィジカル Tr		フィジカル Tr		
夜	ミーティング	ミーティング	ミーティング	ミーティング	ミーティング	

ミーティングの内容と方法

初日は、最初に合宿所での生活全般を含めたルール、マナーについて監督から話があった。その後、1ヵ月後の大会に照準を合わせて、チーム全員で目標を確認し、合宿のコンセプトを監督が話した。2,3,4日目は、監督の司会のもと、選手は練習の反省や明日の目標をメンバーの前で発表した。5日目は、試合の反省をメンバーで話し合い、監督の指名

高校サッカー部の合宿が部内のモラル及び 部員の心理的変容に及ぼす影響

神宮司 親 治

The influence that a high school soccer club training camp has on the moral and psychological transformation of a member

Chikaharu JINGUJI

緒 言

サッカーという競技はチームスポーツであり、チームにおいて重要なことは個人でプレーをするのではなく、味方と協力して守備や攻撃をすることである。互いに協力するチームプレーにおいては、味方プレイヤーの役割や特徴、自分の役割や特徴を理解し、チームの戦術に従いその場その場で最も効果的なプレーを選択することが要求される。プレーの連携を練習することも重要なことであるが、個人個人がチーム目標をしっかりと認識し、目標達成のために自分が何をすべきなのかを考え判断し、協力して行動することも重要なことである。このようにチームがより生産的な集団としてまとめ、力を発揮するために必要な機能に集団モラルがある。竹村・丹羽(1967)¹⁾は、「集団モラルとは、部員が、部の目標に積極的な意義を感じ、強く結束して、その目標達成のために協力する集団機能」としており、モラルの高いチームほど生産性が高いとされている²⁾。チームのモラルを高める試みとして江幡(1977)²⁾は、大学生のバスケットボールチームを対象に集中的グループ体験学習を実施したところ、チーム内のコミュニケーションが活発となり、自己解放性やモラルが向上し相互信頼、相互支持の

関係のより発達したチームに変容したことを報告している。また、土屋・中込(1996)⁵⁾は、チームビルディングプログラムにおいて、自己理解・他者理解を深める作業を含んだグループディスカッションにより、自己開示の進展やモラルの向上が促進されたことを報告している。上述のように、チーム目標を達成するために必要と考えられる自己開示を促し、率直な意見が出せる雰囲気を作り出し、モラルを向上させ相互に協力し合うことを実証したプログラムの有効性が示唆されている。そこで本研究においては、サッカー部の夏期合宿がチームのモラルの向上や戦術理解を含めた心理的な変容について検討することを目的とする。

方 法

被験者

獨協高等学校サッカー部の平成16年度夏合宿に参加した部員のうちデータに欠落のない者17名であった。被験者の内訳は、1年生6名、2年生9名、3年生2名であり、平均年齢15.94歳であった。

調査内容

モラル指標：土屋・中込(1996)⁵⁾がチー

－ 執 筆 者 紹 介 －

柳 本 博 …………… 国 語 科 教 諭
神宮司 親 治 …………… 保 健 体 育 科 教 諭
北 原 武 道 …………… 理 科 教 諭

紀 要 委 員

兼 田 信 一 郎 新 井 洋 一
音 海 紀 一 郎 富 岡 卓

研究紀要 第22号

平成18年3月20日 発行

発行者 東京都文京区関口3丁目8番1号
獨協中学・高等学校 紀要委員会

印刷所 東京都北区王子本町2丁目5番4号
株式会社 王 文 社

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 22

2006

Contents

Educational practice report :

An Earth EXPO Pavilion : A Production Report

..... Hiroshi Yanagimoto ... 1

The influence that a high school soccer club training camp has on the
moral and psychological transformation of a member

..... Chikaharu Jinguji ... (1)

Book review :

Physics as a Scientific Thought by Hideo Takagi

..... Takemichi Kitahara ... (7)

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014